千葉県八千代市

公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ

向　山　遺　跡ｃ地　点
向　山　遺　跡ｆ地　点
ヲイノ作遺跡ｂ地点
小板橋遺跡ｅ地点
阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点

平成26年度

八千代市教育委員会

凡　　例

1．本書は，八千代市教育委員会が平成 13 年度，19 年度，22 年度及び 23 年度に，市の公共事業に先行して実施した埋蔵文化財発掘調査事業の報告書である。本整理及び報告書作成作業は，平成 26 年度事業として行った。

2．本書に収録した発掘調査は，以下のとおりである。

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
1	向山遺跡 c 地点	大和田新田字向山 507-80 ほか	平成 13 年 11 月 13 日～ 平成 13 年 12 月　4 日	上層 81㎡, 下層 20㎡ /630㎡	歩道建設	森　竜哉
2	向山遺跡 f 地点	大和田新田字向山 500-10 ほか	平成 19 年　5 月 10 日～ 平成 19 年　5 月 24日	上層 101㎡, 下層　11㎡ /486㎡	歩道建設	森　竜哉
3	ヲイノ作遺跡 b 地点	緑が丘五丁目 901 番 18・19	平成 22 年 10 月　5 日～ 平成 22 年 10 月　8 日	上層 24㎡, 下層　6㎡ /221.1㎡	歩道建設	常松成人
4	小板橋遺跡 e 地点	大和田字古屋敷 359 番 21・22	平成 24 年　3 月 19 日～ 平成 24 年　3 月 26日	上層 30㎡ /333㎡	道路用地管理	常松成人
5	阿蘇中学校東側遺跡 c 地点	米本字山谷 2713-5, 2714-1, 2715-3	平成 23 年 10 月 12 日～ 平成 23 年 10 月 28 日	上層 502㎡, 下層　80㎡ /4,981.25㎡	消防署建設	宮澤久史

3．出土遺物で用いた砂・礫の表記と大きさの関係については，土壌学及び国際法の基準に従い，以下のとおりである（単位：㎜，礫の大きさは長径）。

巨礫 300 ～ 200，大礫 200 ～ 100，中礫 100 ～ 50，小礫 50 ～ 10，細礫 10 ～ 2，粗砂 2 ～ 0.2，細砂 0.2 ～ 0.02

4．出土した遺物のほか，写真・図面等の調査資料は，八千代市教育委員会が保管している。

5．本書の執筆・図版作成は，常松成人・山下千代子が行い，遺物写真撮影・編集は常松が担当した。

目　　次

凡例
目次　挿図目次　表目次　写真図版目次
Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　各調査の概要
　1．向山遺跡ｃ地点 …… 4
　2．向山遺跡ｆ地点 …… 14
　3．ヲイノ作遺跡ｂ地点 …… 16
　4．小板橋遺跡ｅ地点 …… 19
　5．阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点 …… 23
報告書抄録 …… 31

挿図目次

第１図　本書掲載調査遺跡位置図 …… 2
第２図　向山遺跡ｃ地点・ｆ地点位置図 …… 4
第３図　向山遺跡ｃ地点平面図 …… 6
第４図　１Ｔ実測図 …… 6
第５図　下層調査トレンチ土層断面図 …… 6
第６図　01P 実測図 …… 6
第７図　出土遺物（１） …… 8
第８図　出土遺物（２） …… 9
第９図　向山遺跡ｆ地点トレンチ実測図 …… 14
第10図　ヲイノ作遺跡ｂ地点位置図 …… 16
第11図　ヲイノ作遺跡ｂ地点トレンチ実測図 …… 17
第12図　小板橋遺跡ｅ地点位置図 …… 19
第13図　小板橋遺跡ｅ地点トレンチ実測図 …… 20
第14図　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点位置図 …… 23
第15図　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点トレンチ実測図 …… 24
第16図　01P 実測図 …… 25
第17図　イモ穴参考図 …… 26
第18図　出土遺物 …… 27

表目次

第１表　向山遺跡各調査地点の概要 …… 5
第２表　向山遺跡ｃ地点出土遺物分類表 …… 7
第３表　向山遺跡ｃ地点遺物観察表 …… 10
第４表　小板橋遺跡各調査地点の概要 …… 20
第５表　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点遺構・各トレンチ出土遺物数 …… 26
第６表　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点遺物観察表 …… 27

写真図版目次

図版１　向山遺跡ｃ地点（１） …… 12
図版２　向山遺跡ｃ地点（２） …… 13
図版３　向山遺跡ｆ地点 …… 15
図版４　ヲイノ作遺跡ｂ地点 …… 18
図版５　小板橋遺跡ｅ地点 …… 22
図版６　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点（１） …… 28
図版７　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点（２） …… 29

Ⅰ　調査に至る経緯

八千代市は，首都30㎞圏のベッドタウンとして京成本線沿線を中心に開発が進み，平成８年４月の東葉高速鉄道の開業以後は，その沿線を中心としたまちづくりが進んでいる。こうした状況の中，市内外の諸条件の変化に対応したまちづくりの指針として，八千代市は第３次総合計画を策定し，市政の展開を図ってきた。さらに，平成23年度には，「快適な生活環境とやすらぎに満ちた都市八千代」を実現するために，第４次総合計画を策定し，「市民の誰もが，八千代市に住んでいてよかったと実感できるまち」をめざして，諸事業を実施しているところである。それら市の事業で土木工事を伴う場合について，八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）では，毎年予算策定時期に市役所各課の次年度の公共事業計画を照会することによって把握し，その結果に応じて予算措置をしている。

発掘調査に至る事前手続きとしては，千葉県教育委員会の指導のもと，「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（以下「協議依頼」という。）の提出を求め，回答したうえで，埋蔵文化財包蔵地内の場合は，さらに文化財保護法第94条第１項の通知（以下「土木工事の通知」という。）の提出を求め，「公共事業埋蔵文化財調査事業」として発掘調査を実施している。

以下は，本報告書に掲載した各調査に至る経緯である。平成13年度・19年度・22年度・23年度に実施した東葉高速鉄道に平行する歩道建設に伴う調査３件，都市計画道路用地の管理に伴う調査１件，東消防署建設に伴う調査１件である。なお，平成18年度以前は，現在の協議依頼に当たる文書は，照会制度の改正以前であるため，「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」（以下「照会文書」という。）であり，同様に文化財保護法第94条の通知は，同法改正以前であるため，同法第57条の３第１項の通知であった。

向山遺跡ｃ地点

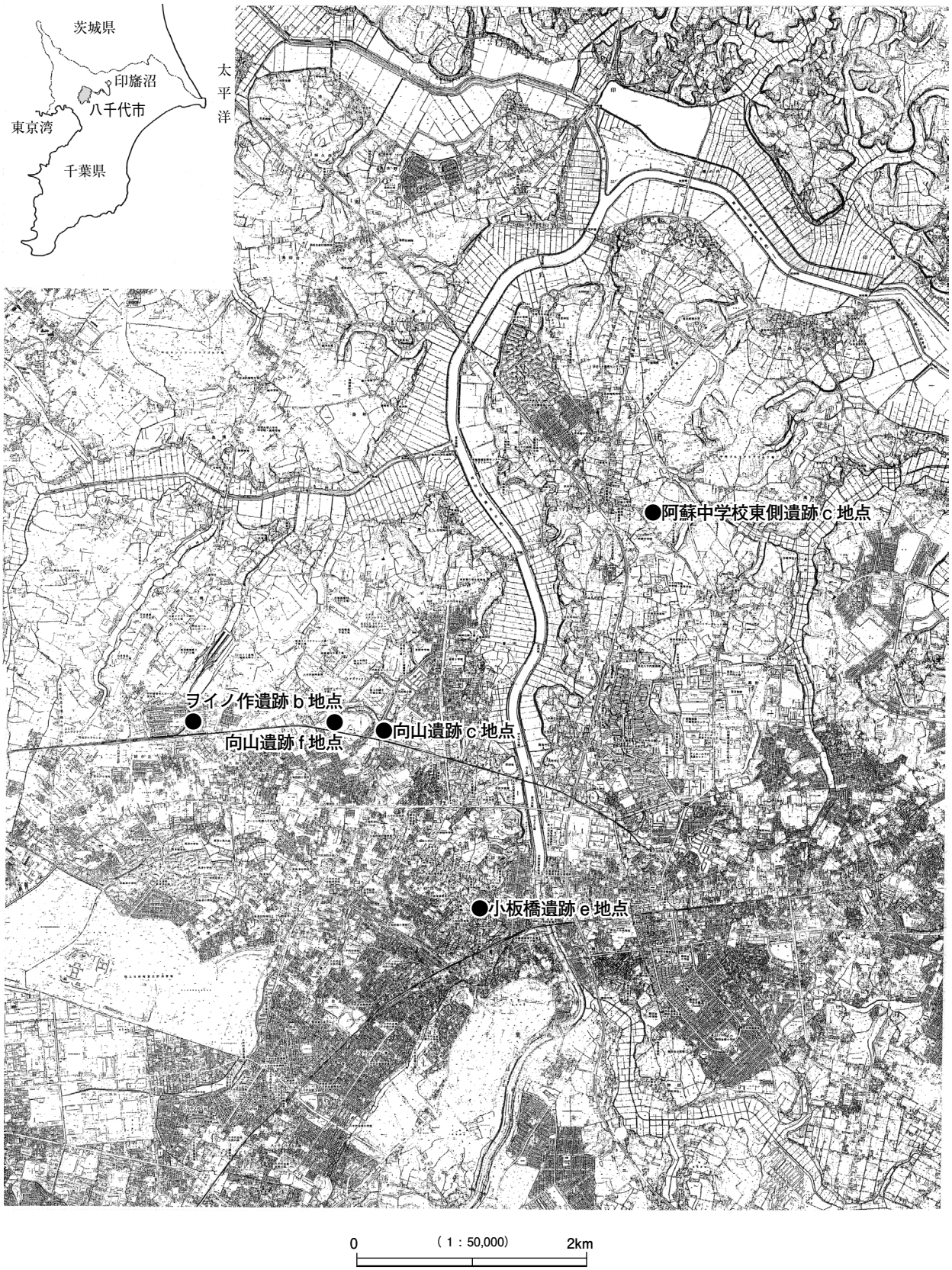
平成13年10月，八千代市長（八千代市都市部都市計画課）から，大和田新田字向山507-80・81，510-3・5の東葉高速鉄道に平行する土地630㎡について，歩道(歩行者専用道路)建設のための照会文書が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり，隣接地や周辺の発掘調査で旧石器，縄文土器等の遺物や遺構を検出している。このため照会地全域について包蔵地の範囲内である旨を回答した。同月に八千代市長から土木工事の通知が提出された。市教委は準備が整った同年11月13日に調査を開始した。

向山遺跡ｆ地点

平成19年４月，八千代市長（八千代市都市整備部都市計画課）から，大和田新田字向山500-10，501-8･10の東葉高速鉄道に平行する土地486㎡について，歩道(自転車歩行者道路)建設のための協議文書が提出された。協議地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり，隣接地の発掘調査で旧石器時代石器等の遺物を検出している。このため協議地全域について包蔵地の範囲内である旨を回答した。同年５月に八千代市長から土木工事の通知が提出された。市教委は準備が整った同年５月10日に調査を開始した。

ヲイノ作遺跡ｂ地点

平成22年５月，八千代市長（八千代市都市整備部都市計画課）から緑が丘五丁目901番18・19の東葉高速鉄道に平行する土地221.1㎡について，歩道(自転車歩行者道路)建設のための協議文書が提出された。協議地の現況は墓地であるが，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり，隣接地の発掘調査で旧石器，縄文時代石器等の遺物や遺構を検出している。このため協議地全域について包蔵地の範囲内である旨を回答し，そ



第１図　本書掲載調査遺跡位置図

（八千代都市計画基本図に加筆）

の取扱いについて協議を行った。協議の結果，墓石等の撤去及び市への移管後に確認調査を実施することとした。同年９月に八千代市長から土木工事の通知が提出され，市教委は準備が整った同年 10 月５日に調査を開始した。

小板橋遺跡ｅ地点

平成 22 年５月，八千代市長（八千代市都市整備部都市計画課）から大和田字古屋敷 359 番 21・22 の都市計画道路用地約 360㎡について，道路管理工事（掘削整地）のための協議文書が提出された。協議地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり，周辺の発掘調査で古墳時代，中・近世の遺物や遺構を検出している。このため協議地全域について包蔵地の範囲内である旨を回答し，その取扱いについて協議を行った。協議の結果，確認調査を実施することとなり，平成 23 年２月に掘削範囲を再測定し面積を 333㎡と改めて，八千代市長から土木工事の通知が提出された。市教委は準備が整った同年３月 19 日に調査を開始した。

阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点

平成 22 年９月，八千代市消防本部消防長から米本字山谷 2713-5, 2714-1, 2715-3 の畑地 4,981.25㎡について，八千代市東消防署建設のための協議文書が提出された。協議地は，阿蘇中学校東側遺跡と赤作遺跡との間隙に当たるが，近隣や周辺で中近世の遺物や遺構を検出しており，現地踏査の結果，土師器細片の散布を確認した。このため協議地全域について埋蔵文化財包蔵地の範囲内である旨を回答し，その取扱いについて協議を行った。その結果，次年度に確認調査を実施することとなった。平成 23 年７月に八千代市消防長から土木工事の通知が提出され，市教委は準備が整った同年 10 月 12 日に調査を開始した。

八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書シリーズ

八千代市教育委員会（2003 年）『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』（沼上遺跡，妙見前遺跡，川崎山遺跡ｊ地点，新久遺跡，麦丸遺跡ｃ地点，子の神台遺跡ａ地点・ｂ地点）

八千代市教育委員会（2007 年）『千葉県八千代市権現後遺跡―公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ―』

八千代市教育委員会（2009 年）『千葉県八千代市おおびた遺跡ｂ地点―公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ―』

八千代市教育委員会（2009 年）『千葉県八千代市殿内遺跡ｂ地点―公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ―』

八千代市教育委員会（2013 年）『千葉県八千代市平沢遺跡ａ地点・殿台遺跡ａ地点―都市計画道路３・４・９号線建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書―』（公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ）

八千代市教育委員会（2014 年）『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ』（麦丸遺跡ｅ地点，サゴテ遺跡ａ地点，北海道遺跡ａ地点，保品南遺跡ａ地点，鶴作台遺跡ｂ地点）

Ⅱ　各調査の概要

１．向山遺跡ｃ地点

遺跡の立地と概要

向山遺跡は，市域の中央部やや南西寄りに所在し，新川低地から南西に入る須久茂谷津の奥部に臨む台地上に立地する。標高は概ね 24 ｍ以下である。萱田地区遺跡群の西方に位置する。

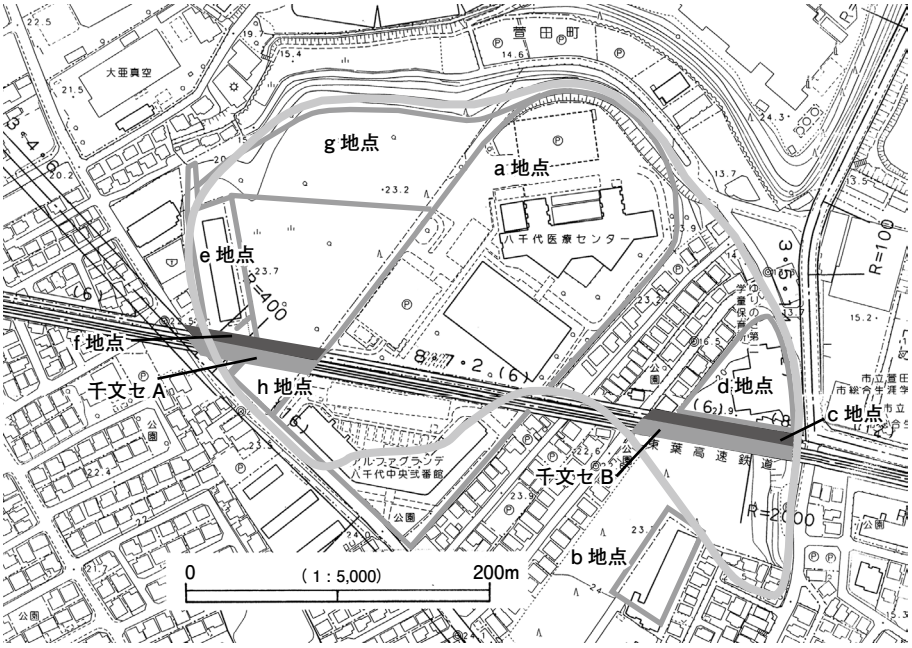
本遺跡は，昭和 56 年（1981 年）のマンション建設に先行する調査で認識され，昭和 58 年（1983 年）の『八千代の遺跡』に遺跡№ 173 として登載された。これまでにｃ地点・ｆ地点を含めて 10 地点で発掘調査が実施されている。東葉高速鉄道建設に伴う財団法人千葉県文化財センター（以下，本項においては「千文セ」という。）の調査区２箇所を含む。その結果の概要については，第１表を参照されたい。本遺跡は，旧石器時代，縄文時代（前期～中期）を中心とする遺跡と捉えることができる。それら以外の要素としては，ｄ地点で須恵器坏口縁１点が出土したのみである。

ｃ地点は，遺跡の東端部の標高 20 ｍ前後の台地上縁辺部である。

調査の方法と経過

調査対象区域は，第３図に示したように，一部は既に千文セ調査区Ｂの拡張によって調査されていることがわかり，その部分を除いてトレンチ１Ｔを設定した。幅２ｍ，長さ約 40 ｍで，一部拡張し，81㎡分の上層調査を行った。下層調査は，千文セの調査区Ｂの結果を参考として，やや東寄りを中心に２ｍ×２ｍのトレンチを５箇所（プレトレンチ，01PRET～05PRETと表記）20㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成 13 年 11 月 13 日から 12 月４日で，11 月 13 日機材搬入，トレンチ設定，重機による掘削，トレンチ内精査。14 日～ 20 日縄文時代遺物包含層調査。16 日トレンチ土層調査，実測記録。16 日・19 日 01Ｐ遺構調査。20 日～ 30 日下層調査。20 日トレンチ設定，掘り下げ。28 日 01PRET･05PRETの土層調査，実測記録。30 日 03PRET･04PRETの土層調査･実測記録，重機による埋め戻し，現場調査は終了，12 月３日・４日出土遺物の水洗・注記を行い，調査を終了した。



第２図　向山遺跡ｃ地点・ｆ地点位置図

第１表　向山遺跡各調査地点の概要

地点名	調査面積（㎡）	遺構	遺物
a	12,000	土坑，焼土跡	旧石器，縄文土器（前期・中期）
b	上層 332.8 下層 9.6 /2,983.06	土坑１基	縄文土器（中期）１点
c	上層 81 下層 20 /630	縄文時代土坑２基	剥片，石鏃，縄文土器（前期・中期），焼成粘土塊
d	380/3,958	なし	縄文土器（前期），須恵器
e	上層 285　下層 21 /2,997.73	なし	なし
f	上層 101　下層 11 /486	なし	なし
g	792/10,813.85	なし	石鏃，剥片，焼礫
h	80/820.86	縄文時代土坑１基	なし
千文セＡ	755	なし	旧石器，剥片，礫片
千文セＢ	1,312	土坑１基	旧石器，剥片，縄文土器（前期・中期），土器片錘

調査の概要

土層の観察所見としては，１Ｔ南壁で全体の土層を確認した。Ⅰ層は盛土及び攪乱で，厚さ 0.27 ～ 0.65 ｍで平均 0.4 ｍ前後であった。以下，Ⅱｂ層（新期富士テフラ層）が厚さ 0.1 ｍ前後で断続的に検出され，Ⅱｃ層（暗褐色土，ローム漸移層）は厚さ 0.2 ｍ前後で安定しており，最下層にⅢ層（ソフトローム）を確認した。地表面の標高は，台地縁辺に当たる東側が高く，19.9 ～ 20.17 ｍで，西側に向かって低くなり，西端は 18.6 ｍとなる。ここには北の須久茂谷津から入る小谷があり，それを反映しているらしい。地表面からⅢ層までの深さは，0.42 ～ 0.70 ｍで平均 0.5 ｍ前後であった。Ⅲ層上面の標高も，東側が高く 19.5 ｍ前後，西端は 18.1 ｍと低くなる。

下層調査のトレンチのうち，05PRETのⅢ層以下の土層を図示した。地表下 2.7 ｍ，標高 17.3 ｍまで掘り下げた。Ⅳ～Ⅴ層（ハードローム，第１黒色帯），Ⅵ層（ＡＴ包含層），Ⅶ層（第２黒色帯上部），Ⅸａ層（第２黒色帯下部の上半），Ⅸｂ層（第２黒色帯下部の間層），Ⅸｃ層（第２黒色帯下部の下半），Ⅹ層とした。標高 18.3 ｍ前後に層厚 0.1 ～ 0.15 ｍの暗色の層があり，第２黒色帯下部の一部と考えられた。これをⅨａ層と判断し，標準層位に当てはめたものである。

遺構について

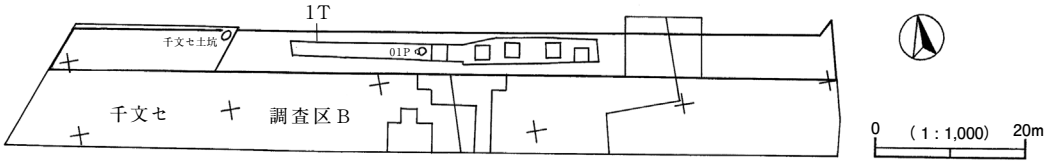
検出遺構は，トレンチ中央やや西寄りで土坑を検出し，調査した。01 Ｐ土坑としたが，土坑２基が交わっているものと判断した。浅い土坑（Ｂ）を，より深い土坑（Ａ）が切っている。Ａはほぼ円形で，上面は 0.92 ｍ× 0.89 ｍ，底面はやや楕円形に近く 0.73 ｍ× 0.64 ｍ，深さは 0.25 ～ 0.36 ｍで底面に凹凸がある。覆土は，６層に分層された。Ｂは，Ａと攪乱によってほとんど壊されており，残存部の上面は 0.79 ｍ× 0.42 ｍ，底面は 0.59 ｍ× 0.31 ｍ，深さは 0.1 ～ 0.16 ｍである。出土遺物は，前期黒浜式と考えられる繊維土器の小片１点である。

遺物について

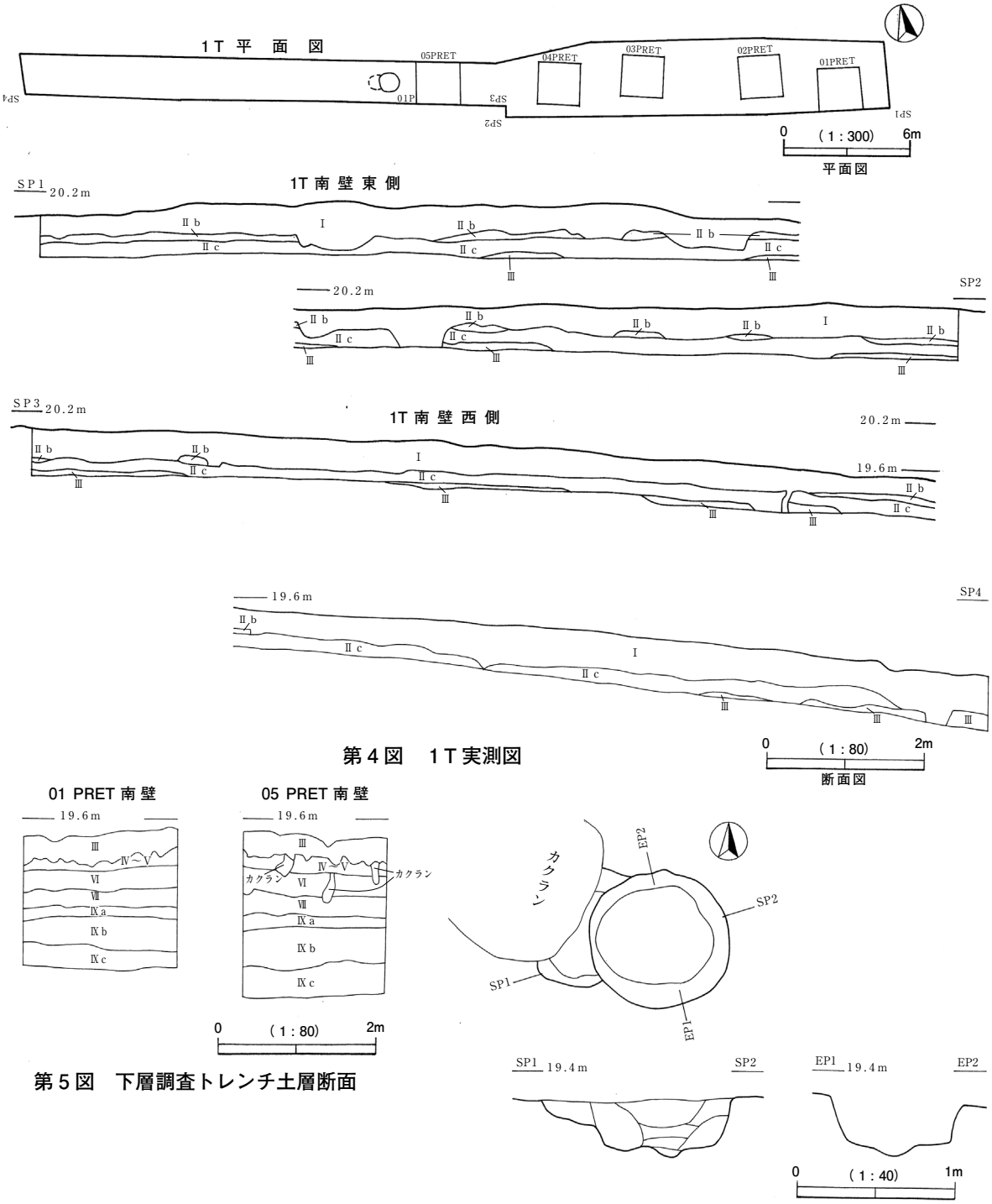
遺物は総数 352 点出土した（第２表）。内訳は，縄文土器 268 点，焼成粘土塊 72 点，石器（鏃）１点，剥片９点，小礫１点，焼礫片１点である。全体の 76.1％に当たる 268 点は縄文土器，20.5％に当たる 72 点は焼成粘土塊である。縄文土器 268 点のうち，約 46.3％に当たる 124 点は前期後半（浮島式）～末に，28.7％に当たる 77 点は中期（阿玉台Ⅱｂ式等）に，25％に当たる 67 点は前期中葉（黒浜式）に属すると判断した。

旧石器時代の遺物については，下層調査トレンチから剥片が１点のみ出土したが，１Ｔ出土遺物の中に剥片があり，６点を旧石器時代のものと判断した。

遺物の出土状況は，１Ｔの東半に分布の中心があり，東端から 18 ｍの範囲にほとんどの遺物が入る。特に東端から４ｍの範囲は，遺物密度が高い。



第３図　向山遺跡ｃ地点平面図



第４図　１Ｔ実測図

第５図　下層調査トレンチ土層断面

第６図　01P 実測図

第２表　向山遺跡 c 地点出土遺物分類表

遺物種類		トレンチ					遺 構	計
		1 T		01PRET	03PRET	04PRET	01P	
		No.付	一括	一括	一括	一括	No.付	
縄文土器	前期中葉	55	10	0	1	0	1	67
縄文土器	前期後半	79	24	0	0	1	0	104
縄文土器	前期末	17	0	0	0	3	0	20
縄文土器	中期	63	12	0	0	2	0	77
土器類小計		214	46	0	1	6	1	268
焼成粘土塊		54	8	0	10	0	0	72
石器	石鏃	1	0	0	0	0	0	1
石器	剥片	8	0	1	0	0	0	9
礫	小礫	1	0	0	0	0	0	1
礫	礫片	1	0	0	0	0	0	1
計		279	54	1	11	6	1	352

焼成粘土塊について

遺物の中で特徴的なのは，72 点出土した焼成粘土塊である。大きさは，最大のものが第８図 **42** である。焼成は，いずれも不良で脆く，崩れやすい。淡褐色を基調とし，褐色等が混じる。粘土の混入物は，黒色の粒子や赤褐色粒子が見える。縄文土器と混在して出土しており，所属時期は，縄文土器と同じく縄文時代前期～中期の範囲内と見てよいと思われる。縄文土器のうち，最多の出土量は前期後葉～末葉であるので，該期に属する可能性は高いが，出土状況でそれを明らかにすることはできなかった。

焼成不良の粘土にどのような用途を想定できるであろうか。焼成不良であるから，よく言われる土器等のテストピースとして焼いてみたということは想定しにくい。あるいは，他の焼成品の副産物として生じたものであったり，保管されていた粘土が火事等で偶然焼けてしまったということなのであろうか。

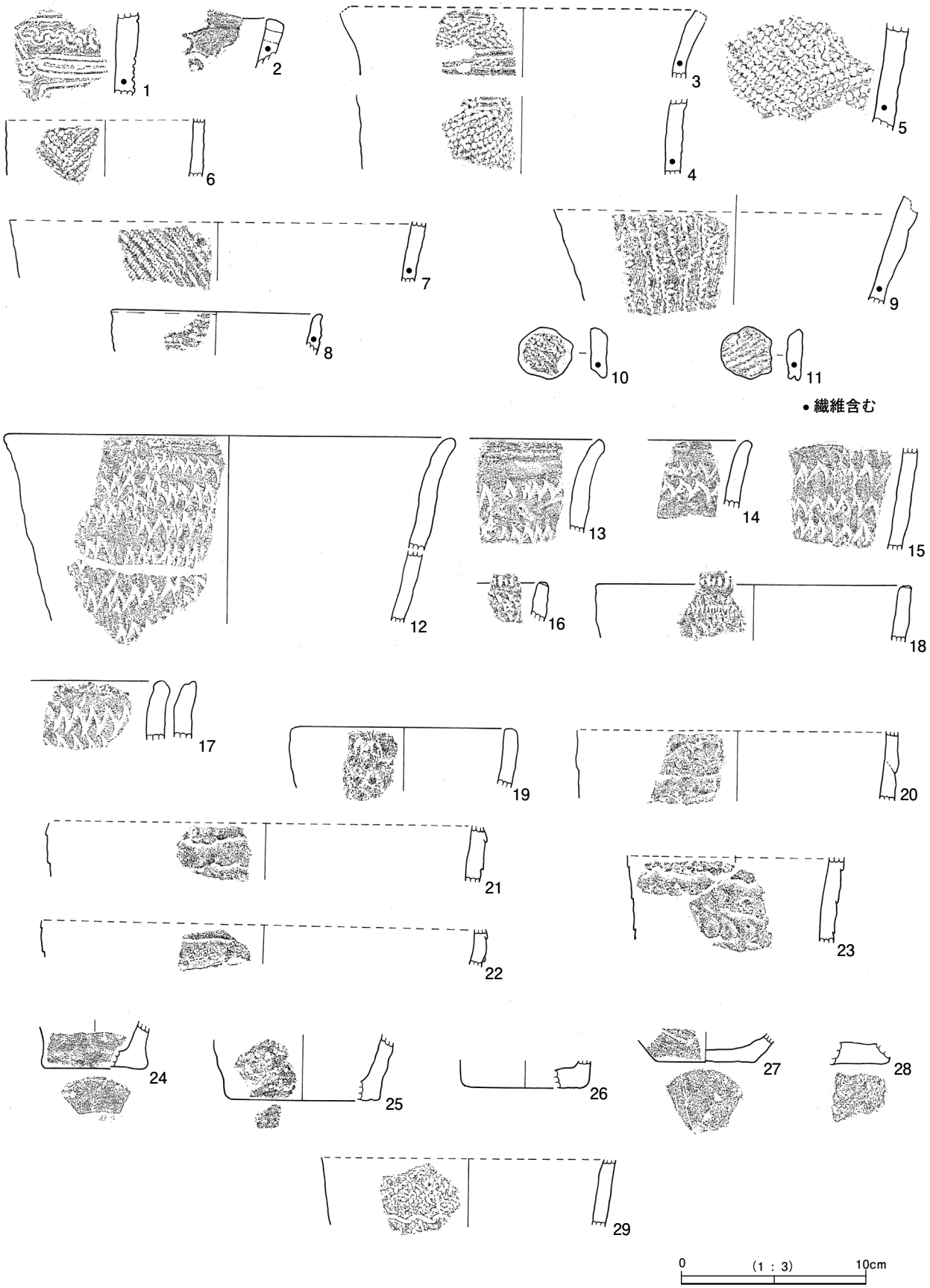
いずれにせよ，縄文時代人が意図的に入手した粘土と考えてよいであろう。粘土の用途は，第一に土器・土製品の材料が考えられることは言うまでもない。他に以下のような事例がある。

①埋葬に関わった事例として，人骨が褐色粘土で覆われていたという茨城県稲敷市広畑貝塚の事例（小林克ほか 2001 年）。

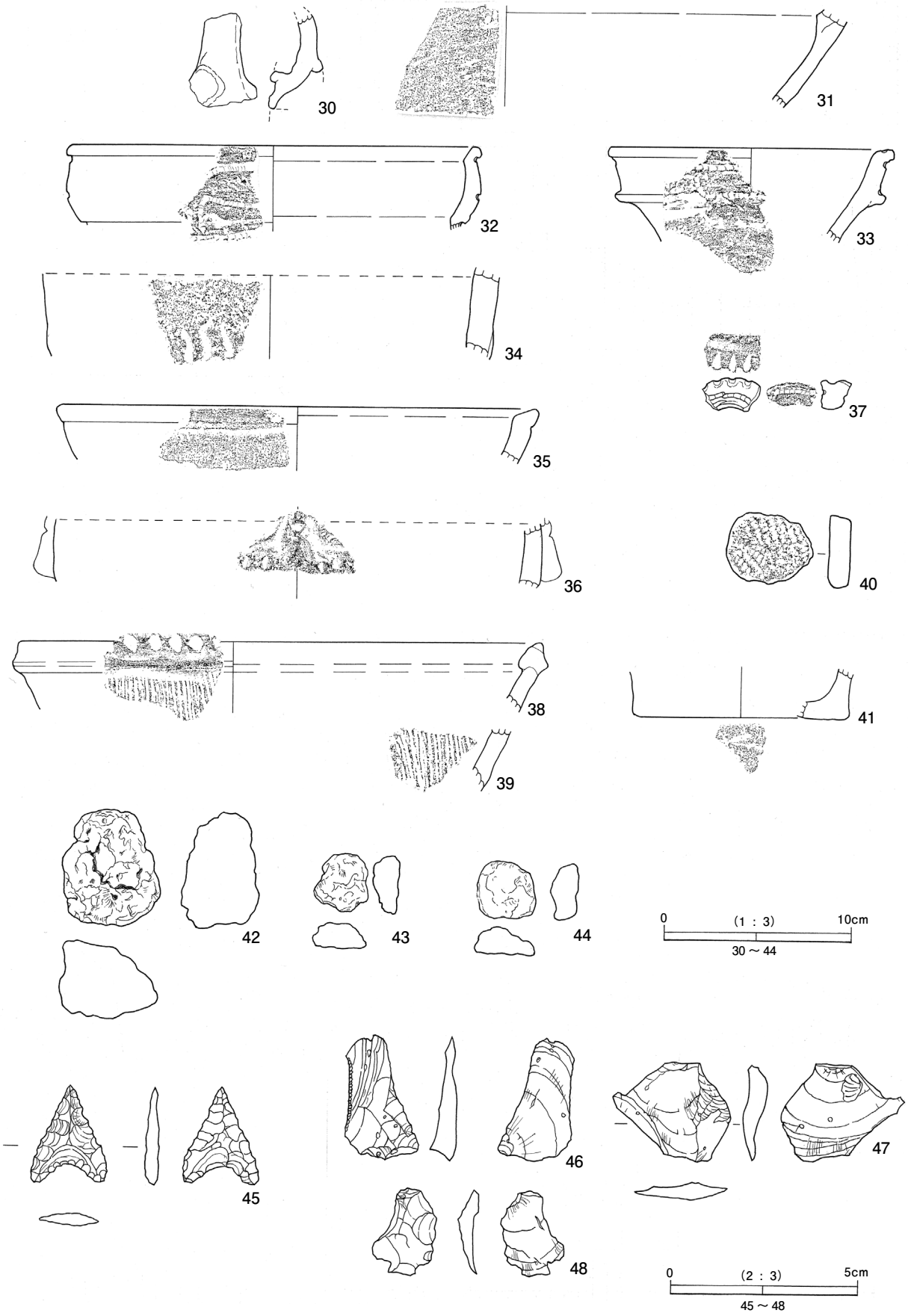
②民俗事例で洗髪用に使ったという話があり，「髪は半月から一ヶ月くらいの間隔で洗い，洗い粉や，家の裏手や山ぎわからヒナッタ（粘土）を取ってきて水にとかして洗髪すると汚れが落ちて髪がしっとりしたといいます。このヒナッタは昭和十五・六年ごろまで使っていました。」（木原 1993 年）という。これに類似するような利用方法が縄文時代にもあったかもしれない。

③白色の染料のように使われた事例。

仮に土器製作用の粘土だとした場合，繊維・粗砂・細礫・雲母がほとんど含まれない，という点で，ｃ地点で出土しているどの時期の縄文土器の胎土とも明らかに異なっている。ということは，縄文人はこのような純粋な粘土を手に入れ，これに砂等を混ぜて土器の胎土を作っていたということを裏付ける証拠と言えるかもしれない。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
• 繊維含む
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
(1 : 3)
10cm

第７図　出土遺物（１）


30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
(1 : 3)
10cm
30 ～ 44
45
46
47
48
0
(2 : 3)
5cm
45 ～ 48

第 8 図　出土遺物（2）

第３表　向山遺跡ｃ地点遺物観察表（第７図・第８図）

№	出土地点	器形	状態・部位	計測値(mm)	○胎土／石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	１Ｔ-124	深鉢	胴部	—	○繊維，粗砂 ●褐色	内）ナデ。 外）平行沈線，コンパス文。	縄文土器 前期中葉 黒浜式を 主体とする。
2	１Ｔ-55	深鉢か	口縁部	—	○繊維か，粗砂 ●内）橙褐色　外）褐色，橙褐色　割口）黒色	焼成前貫通孔。内）ナデ，ミガキ。 外）円文かコンパス文，ナデ。	
3	１Ｔ	深鉢	口縁部か	復元上端径 190	○繊維，粗砂ごく少，細砂 ●内）淡褐色　外）褐色　割口）黒色	内）ナデ。 外）短沈線，半切竹管による平行沈線，縄文ＲＬか。	
4	１Ｔ-38	深鉢	胴部	復元上端径 172	○繊維，粗砂ごく少，細砂 ●内）淡褐色　外）褐色　割口）黒色	内）横方向ナデ。 外）刺突か，短沈線，縄文ＬＲか。	
5	１Ｔ-170	深鉢	胴部	復元上端径 332	○繊維，粗砂多，細砂，細礫 ●内）褐色　外）褐色，赤褐色	内）縦方向ナデ・ミガキ。 外）ＲＬ・ＬＲの羽状縄文。	
6	１Ｔ	深鉢	胴部	復元上端径 104	○繊維，粗砂まばら，細砂 ●内）褐色　外）橙褐色	内）ナデ，ミガキ，平滑。 外）ＲＬ・ＬＲの羽状縄文か。	
7	１Ｔ-40	深鉢	胴部	復元上端径 218	○繊維，粗砂まばら，細砂 ●内）淡褐色，褐色　外）淡褐色	内）ナデ，ミガキ，平滑。外）ＲＬ縄文か。節が細かい。 条間に隙間あり。右上に瘤状の粘土貼付がある。	
8	１Ｔ-173	深鉢か鉢	口縁部	復元口径 110	○繊維，細砂少 ●内）暗褐色　外）褐色，黒褐色	内）ナデ，ミガキ，平滑。 外）文様は不明瞭。	
9	１Ｔ-24	深鉢	胴部	復元上端径 188	○繊維，細砂ごく少　●内）灰褐色，黒色 外）赤褐色　割口）黒色，橙色	内）ナデ，縦方向ミガキ。 外）有肋貝殻腹縁文。	
10	１Ｔ-57	土器片円板		26 × 28，厚さ 8	○繊維少，粗砂，細砂 ●内）淡褐色　外）淡褐色　割口）黒色	割れ口の磨きは顕著ではない。 内）ナデ。外）撚糸文か。	
11	１Ｔ-151	土器片円板		26 × 27，厚さ 8	○繊維，粗砂 ●内）暗褐色　外）褐色	割れ口の磨きは顕著ではない。 内）ナデ。繊維が外れた窪み。外）無節縄文か。	
12	１Ｔ-30 １Ｔ-2	深鉢	口縁～ 胴上部	復元口径 236 残存高 98	○粗砂・細砂多，細礫 ●内）橙褐色　外）淡褐色，橙褐色	内）肌荒れのような状態。 外）波状貝殻文（無肋）。	縄文土器 前期後葉 浮島式を 主体とする。 12 ～ 15 は同一 個体か。
13	１Ｔ-29	深鉢	口縁部	—	○粗砂・細砂多，細礫 ●内）橙褐色　外）淡褐色，橙褐色	内）肌荒れのような状態。 外）波状貝殻文（無肋）。	
14	１Ｔ-1	深鉢	口縁部	—	○粗砂・細砂多，細礫 ●内）淡褐色　外）橙褐色	内）肌荒れのような状態。 外）波状貝殻文（無肋）。	
15	１Ｔ-28	深鉢	胴上部	—	○粗砂・細砂多，細礫 ●内）褐色，赤褐色　外）褐色	内）肌荒れのような状態。 外）波状貝殻文（無肋）。	
16	１Ｔ-104	深鉢か	口縁部	—	○粗砂・細砂 ●内）淡褐色，褐色　外）淡褐色	口唇上）刻み。内）ナデ。 外）波状貝殻文（無肋）。	
17	１Ｔ-152	深鉢	口縁部	復元口径 526	○粗砂・細砂 ●内）淡褐色　外）淡褐色	口唇に特徴あり。内）横方向ナデ。 外）波状貝殻文（無肋）。	
18	１Ｔ-178	深鉢	口縁部	復元口径 164	○粗砂少 ●内）淡褐色　外）淡褐色	口唇上）刻み。内）ナデ。荒れている。 外）波状貝殻文（無肋），密なところあり。	
19	１Ｔ-108	深鉢か鉢	口縁部	復元口径 120	○粗砂，細礫 ●内）褐色，黒褐色　外）淡褐色	内）ナデ。 外）亀裂・凹凸あり。	
20	１Ｔ-203	深鉢	胴部	復元上端径 174	○細砂，粗砂 ●内）淡褐色，灰褐色　外）淡褐色，褐色	内）縦方向ナデ・ミガキ。 外）輪積痕，亀裂・凹凸あり。	
21	１Ｔ-204	深鉢	胴部	復元上端径 238	○細砂，粗砂 ●内）褐色　外）褐色	内）ナデ，縦方向ミガキ，平滑。 外）輪積痕２段。	
22	１Ｔ-75	深鉢	胴部	復元上端径 242	○細砂，粗砂 ●内）橙褐色　外）淡橙褐色	内）ナデ。 外）輪積痕２段。横方向の沈線状窪みあり。	
23	１Ｔ-19	深鉢	胴部	復元上端径 118	○細砂，粗砂 ●内）黒灰色，黒褐色　外）橙褐色	内）ナデ，平滑。 外）輪積痕３段。	
24	１Ｔ-33	深鉢	底部	復元底径 58	○細砂多，粗砂少 ●内）淡褐色　外）淡橙褐色	内）ナデ。　底外）ミガキ，平滑。 外）ナデ，ミガキ。	
25	１Ｔ-46	深鉢	底部	復元底径 84	○粗砂多，細砂 ●内）黒褐色，灰黒色　外）褐色，橙色	内）ナデ。　底外）ナデか。 外）凹凸あり。	
26	１Ｔ	深鉢	底部	復元底径 70	○粗砂，細砂 ●内）灰色　底外）褐色　外）淡赤褐色	内）凹凸あり。　底外）ミガキ。 外）ナデか。	
27	１Ｔ	鉢か	底部	復元底径 56	○細砂，粗砂 ●内）暗褐色，褐色　外）褐色，淡褐色	内）ナデ，ミガキ。　底外）ヘラ削り後ナデ・ミガキ。 外）斜方向ヘラ削り。	
28	１Ｔ-199	深鉢か	底部	—	○粗砂多，細礫 ●内）灰白色　外）橙褐色	内）ナデ。 底外）ヘラ削り。	
29	１Ｔ-4	深鉢	胴部	復元上端径 158	○細砂，粗砂 ●内）淡橙褐色　外）褐色	内）横方向ナデ，ミガキ。 外）Ｚ字状結節文。縄文ＬＲか。	縄文土器 前期末葉
30	１Ｔ	深鉢か	把手部	残存高 48	○雲母，石英細礫，粗砂多 ●淡橙褐色	内）ナデ，平滑。土器本体から外れた痕跡。 外）ナデ。装飾が外れた痕跡。	縄文土器 中期 阿玉台Ｉｂ式 を主体とする。
31	１Ｔ-62	浅鉢か	胴上部	復元上端径 350	○粗砂多 ●内）橙褐色，褐色　外）褐色，淡灰褐色	内）横方向ナデ，ミガキ，平滑。段あり。 外）押引文。横方向ナデ痕顕著。	
32	１Ｔ-216	深鉢か	口縁部	復元口径 214	○細砂，粗砂 ●淡橙褐色	内）稜２箇所。ナデ，ミガキ，平滑。 外）口縁肥厚，隆帯。押引文。	
33	１Ｔ-193	深鉢か鉢	口縁部	復元口径 148	○粗砂・細砂多 ●淡褐色，灰色	内）横方向ナデ。 外）隆帯，押引文，ナデ。	
34	１Ｔ-26	深鉢	胴上部	復元上端径 236	○石英細礫多，粗砂 ●内）褐色，黒色　外）暗橙褐色，褐色	内）ナデ。 外）ひだ状文。	
35	１Ｔ-60	深鉢か鉢	口縁部	復元口径 248	○雲母，石英細礫，粗砂 ●橙褐色，暗橙褐色	内）ナデ。 外）削り出したような段が巡る。横方向ナデ。	
36	１Ｔ-239	—	把手部	—	○細砂，粗砂 ●内）橙色　外）淡褐色	内）押引文。　口唇上）幅広沈線。 外）刻み。押引文。	
37	１Ｔ-84	深鉢	頚部	復元上端径 248	○粗砂多，細礫 ●内）淡橙褐色，赤褐色　外）赤褐色	内）ナデ。 外）刻みのある隆線。ナデ痕あり。	
38	１Ｔ-51	深鉢か	口縁部	復元口径 328	○粗砂，細礫 ●淡褐色，灰色	内）段あり。横方向ナデ。　口唇上）刻み。 外）隆線，横方向のナデ。縦位の沈線が充填される。	38・39 は同一 個体であろう。
39	１Ｔ	深鉢か	口縁付近か	—	○粗砂，細礫 ●内）淡褐色　外）黒灰色，灰褐色	内）ナデ。上部に段の一部が見える。 外）縦位の沈線が充填される。	
40	１Ｔ-212	土器片円板		37 × 45，厚 11	○雲母，石英細礫多，粗砂 ●内）黒褐色，黒色　外）淡橙褐色	割れ口の磨きは顕著ではない。 内）ナデ。　外）縄文ＲＬ。	
41	１Ｔ-102	深鉢	底部	復元底径 116	○石英・長石の細礫多，粗砂多 ●内）灰黒色　外）淡灰褐色	内）ナデ。　底外）窪みあり。網代痕を消した痕跡か。 外）ナデ，平滑。	
42	03PRET	焼成粘土塊		62 × 52.5 × 41.5	○赤褐色粒子・黒色粒子 ●黄褐色，淡褐色	脆い。亀裂多数，孔あり。	
43	03PRET	焼成粘土塊		31 × 24 × 14	同上	平坦な一面がある。	
44	03PRET	焼成粘土塊		30.5 × 32 × 15	同上	平坦な一面がある。	
45	１Ｔ-107	石鏃		26 × 20，厚 3	○頁岩　●赤褐色	完形	
46	１Ｔ-241	剥片		32.5 × 20，厚 7	○黒曜石，白色粒子含む　●黒色	側面に一部刃潰し様の加工がある。	
47	１Ｔ-190	剥片		26 × 32.5，厚 6	○黒曜石，白色粒子含む　●黒色，透明		
48	01PRET -1	剥片		23 × 17，厚 4	○チャート，暗褐色物質混入　●灰色，暗褐色	石質不良。	
49	１Ｔ-220	剥片		15.5 × 22，厚 3	○チャート，暗褐色物質混入　●灰色，暗褐色	石質不良。	49 ～ 51 は 図を省略 写真掲載
50	１Ｔ-44	剥片		17.5 × 9，厚 1.5	○チャート　●灰色		
51	１Ｔ-242	剥片		19 × 8.5，厚 2.5	○チャートか頁岩　●赤みを帯びた灰色		

調査のまとめ

ｃ地点の成果は，旧石器・縄文時代（前期～中期）を主体とする本遺跡のこれまでの調査結果と一致するものである。旧石器時代の遺物として剥片６点が出土した。縄文時代は，前期（黒浜期か）の土坑２基（重複）を検出し，前期～中期の土器，焼成粘土塊，石鏃などが出土した。

本遺跡における旧石器時代の様相は，ｃ地点の南に隣接する千文セ調査区Ｂでは，Ⅸａ層から剥片とナイフ形石器各１点が出土し，ｆ地点に隣接する千文セ調査区Ａでは，Ⅳ～Ⅴ層及びローム上層付近から旧石器時代の遺物集中地点が２箇所検出され，スクレーパーや剥片，焼礫片，礫器などが出土した。少なくとも二枚の文化層が存在することになる。ａ地点は未整理であるが，旧石器（ナイフ形石器，ポイント）が出土したという。

本遺跡における縄文時代の様相は，ｃ地点の南に隣接する千文セ調査区Ｂでは，縄文土器（前期中葉～中期前葉，黒浜式・浮島式・阿玉台式等）675 点，土器片錘７点（黒浜式転用５点・阿玉台式転用２点）が出土した。縄文土器 268 点が出土したｃ地点と合わせ，縄文土器の分布の中心の一つが両地点に亘っていると言える。北に隣接するｄ地点では縄文土器９点（黒浜式土器２点等を含む）が出土した。ａ地点は未整理であるが，縄文土器（前期～中期），土坑・焼土跡の検出が記録されている（堀部 1991 年）。ｂ地点では，縄文土器（中期阿玉台式）１点，時期不明土坑１基が検出された。これらの調査は，本遺跡の東部の状況を示すものである。

次項のｆ地点は，本遺跡の西端に位置し，遺構・遺物とも検出されなかった。隣接のｅ地点も同様であり，周辺のｇ地点は確認調査面積 792㎡で，石鏃・剥片・焼礫各１点のみ，ｈ地点では土坑１基を検出し，遺物は出土しなかった。本遺跡西部は遺構・遺物ともごく散漫であり，縄文土器の出土事例は無い。

以上により，前期黒浜式・浮島式，中期阿玉台式を中心とした，遺構・遺物とも密度の低い遺跡であり，竪穴住居跡は検出されず，集落跡が展開する可能性は低い。遺物の分布は東部に偏るが，土器片錘・焼成粘土塊の存在が注目される。なんらかの作業・活動の場となっていたのであろう。他方，ｃ地点・ｇ地点の石鏃の出土から，狩猟の場として向山の台地が広く利用されていた可能性もある。

引用文献及び本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（1983 年）『八千代の遺跡―千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書―』

堀部昭夫（1991 年）「市内発掘調査情報」，八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』

木原律子（1993 年）「衣生活」，八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 資料編 民俗』

財団法人千葉県文化財センター（1994 年）『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他―東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書―』

小林克・岡田淳子・両角まり・奈良貴史（2001 年）「広畑貝塚出土人骨の修復と鑑定」（『東京都江戸東京博物館研究報告』第７号　東京都江戸東京博物館）

八千代市教育委員会（2002 年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 13 年度』（ｂ地点）

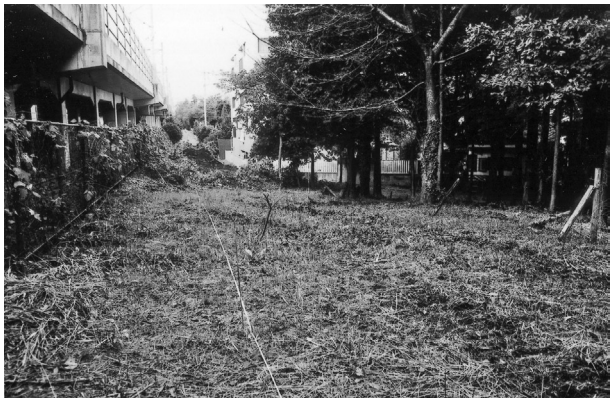
八千代市教育委員会（2007 年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 18 年度』（ｄ地点）

八千代市教育委員会（2009 年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 20 年度』（ｅ地点）

八千代市教育委員会（2013 年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 24 年度』（ｇ地点・ｈ地点）

図版１　向山遺跡ｃ地点（1）

（１）　調査前状況（西から）

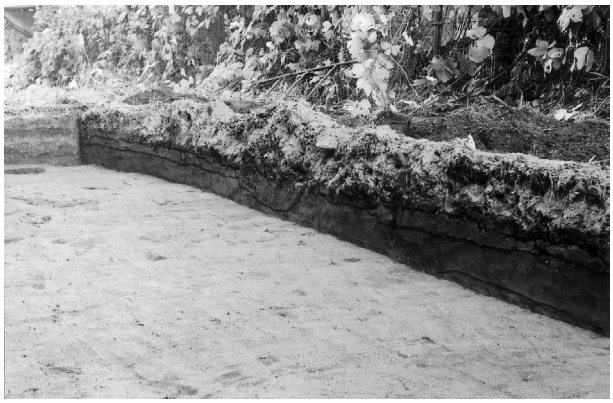


（２）　調査前状況（東から）

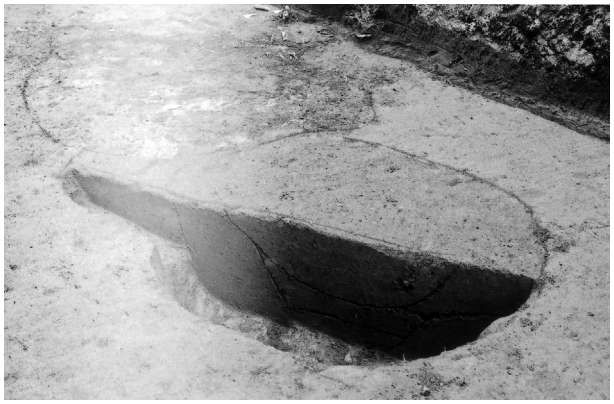
（３）　１Ｔ遺物出土状況－１－

（４）　１Ｔ遺物出土状況－２－

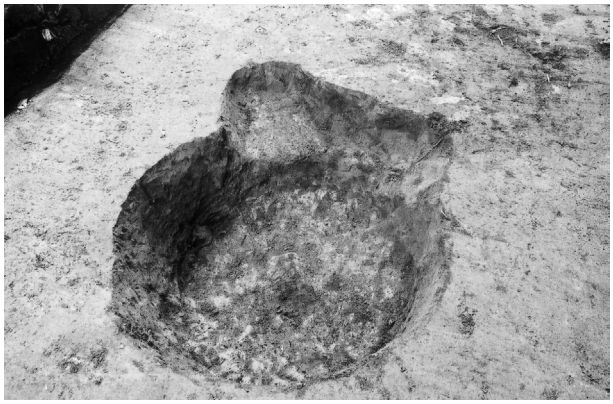
（５）　１Ｔ南壁土層断面



（６）　１Ｔ南壁東端土層断面

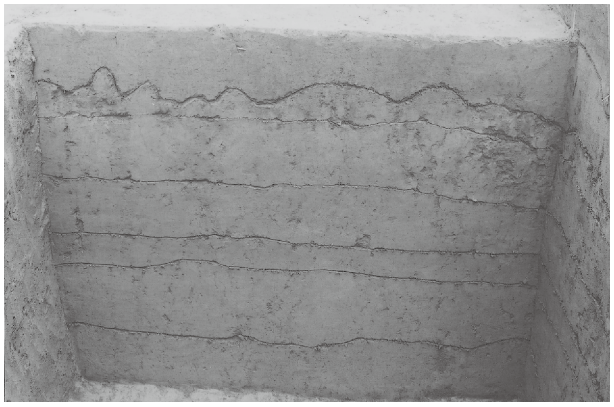


（７）　01Ｐ土層断面



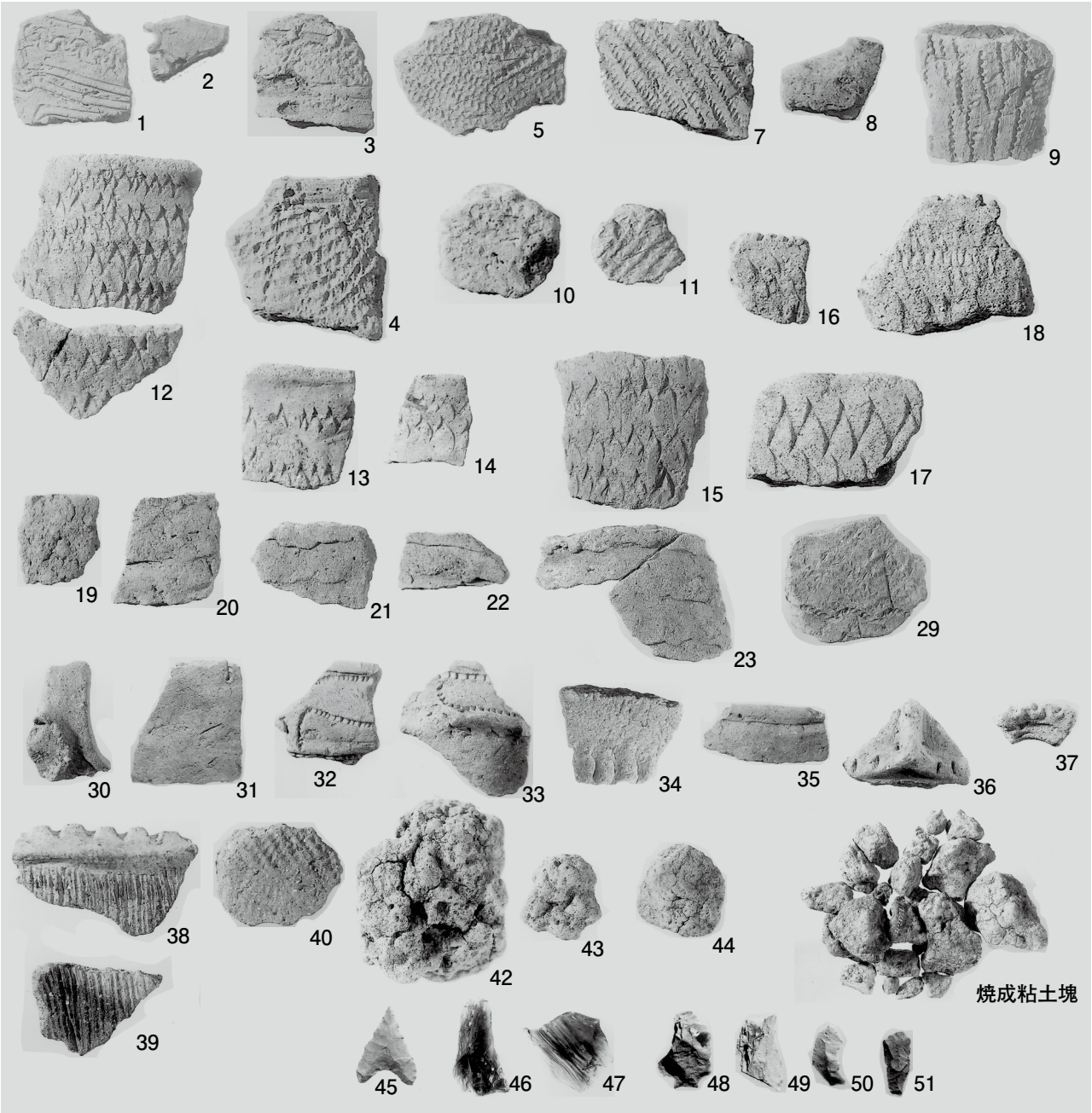
（８）　01Ｐ完掘状況

図版２　向山遺跡 c 地点（2）



（1） 01 PRET 南壁土層断面

（2） 05 PRET 南壁土層断面



（3） 出土遺物　番号は第７図・第８図・第３表と一致

２．向山遺跡ｆ地点

遺跡の立地と概要

本遺跡の立地等については，前項を参照されたい。

ｆ地点は，本遺跡の西端部標高23ｍ前後の台地上平坦部である。

調査の方法と経過

対象区域の形状に合わせて，２ｍ幅のトレンチを5.5ｍ，15ｍ，30ｍの長さで設定し，合計101㎡の上層調査を行った。下層調査は，財団法人千葉県文化財センターの調査区Ａの結果を参考として，最も西寄りのトレンチ（３Ｔ）11㎡を対象とした。これらを人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成19年５月10日から24日である。10日機材搬入，トレンチ設定。11日・14日人力による掘削。15日・16日・21日重機による掘削，トレンチ内精査。16日・21日下層調査。22日土層調査，実測記録。23日重機による，埋め戻し。24日機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

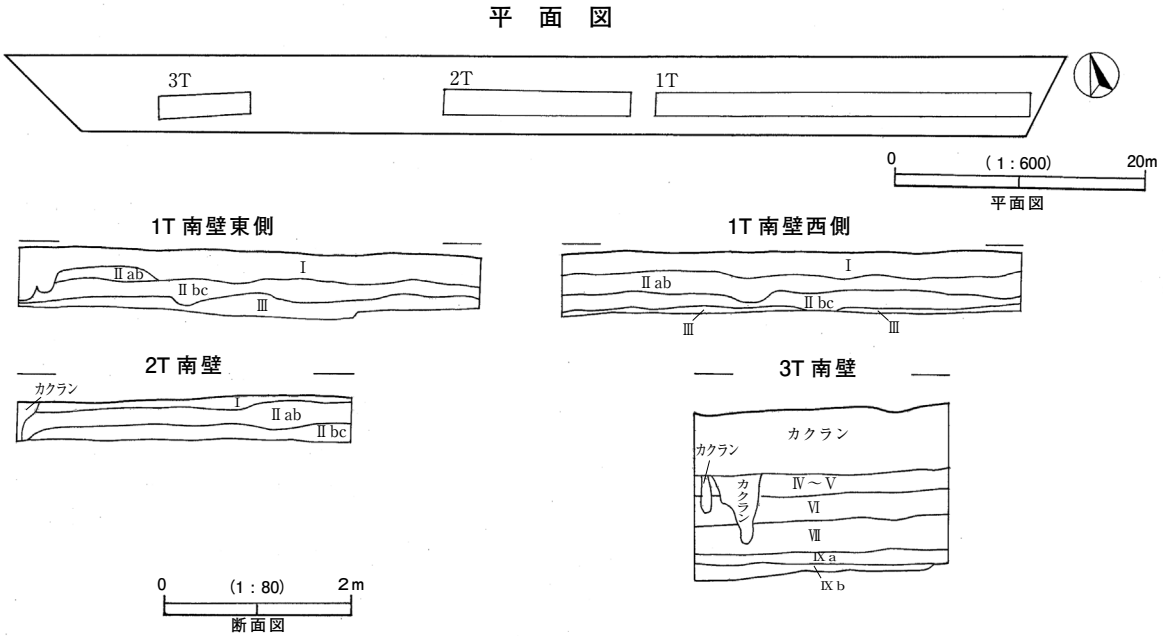
土層の観察所見は，各トレンチの南壁で行った。Ⅰ層（表土）は埋土及び攪乱で，厚さ0.1～0.3ｍであった。以下，Ⅱａｂ層（暗褐色～黒色土，腐植堆積土層～新期富士テフラ層），Ⅱｂｃ層（暗褐色～黄褐色土，新期富士テフラ層～ローム漸移層）が検出され，深さ0.4～0.6ｍでⅢ層（ソフトローム）に達した。地表面の標高は，東側の１Ｔが高く，２Ｔの方が低くなる。

下層調査は３Ｔで行った。表土は攪乱で，地表下0.6～0.7ｍに及んでいた。以下，Ⅳ～Ⅴ層（ハードローム，第１黒色帯），Ⅵ層（ＡＴ包含層），Ⅶ層（第２黒色帯上部），Ⅸａ層（第２黒色帯下部の上半），Ⅸｂ層（第２黒色帯下部の間層）とした。地表下1.5ｍに厚さ0.1ｍの暗色の層があり，ｃ地点と同様にこの層をⅨａ層と判断した。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

本地点では，遺構・遺物とも検出されなかった。遺跡全体の状況については，前項にまとめた。



第９図　向山遺跡ｆ地点トレンチ実測図

図版３　向山遺跡 f 地点

（1）　調査前状況（西から）

（2）　調査前状況（東から）

（3）　調査状況

（4）　1Ｔ完掘状況

（5）　2Ｔ完掘状況

（6）　1Ｔ南壁東側土層断面

（7）　1Ｔ南壁西側土層断面

（8）　3Ｔ南壁土層断面

３．ヲイノ作遺跡ｂ地点

遺跡の立地と概要

ヲイノ作遺跡は，市域の西部，桑納川から南西に入る花輪谷津の奥部に所在し，谷津を西に臨む台地上，標高 28 m以下に立地する。

本遺跡は，昭和 58 年（1983 年）の『八千代の遺跡』に遺跡№ 162 として登載され，昭和 61 年（1986 年）に西八千代東部土地区画整理事業（東葉高速鉄道八千代緑が丘駅周辺）に先行して発掘調査されている。遺構として縄文時代早期末葉の炉穴５基・土坑１基，前期中葉黒浜式期の竪穴住居跡１軒，後期中葉加曽利Ｂ式期の竪穴住居跡１軒，陥穴３基，土坑７基等が検出され，遺物は縄文時代早期，前期，後期の土器と，土製玦状耳飾り，石鏃，磨石，磨製石斧等が出土した。東葉高速鉄道建設に伴う財団法人千葉県文化財センターの調査では，旧石器時代の石器（石核，スクレーパー）・剥片，縄文時代の陥穴１基，石器（ピエスエスキーユ，石鏃）・剥片が検出された。以上により，本遺跡は，旧石器時代，縄文時代（早期・前期・後期）を中心とする遺跡と捉えることができる。

本地点は遺跡の東端に当たる。標高 28 m前後の台地上平坦面である。

本遺跡の周辺は，花輪谷津を囲むように内野南遺跡・八幡藪遺跡・仲ノ台遺跡・ヲイノ作南遺跡・大和田新田芝山遺跡が展開している。これらの遺跡は，前述した西八千代東部土地区画整理事業，東葉高速鉄道建設事業及び宅地開発事業等に先行して発掘調査されている。その結果，旧石器時代，縄文時代，奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されており，弥生時代，古墳時代の要素はほとんど見られない。

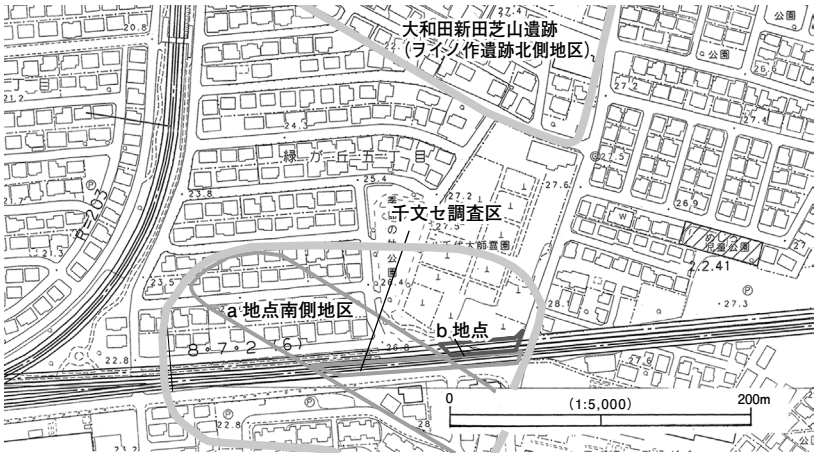
調査の方法と経過

対象区域の形状に合わせて任意に２ｍ×６ｍのトレンチを２箇所，６ｍ間隔で設定し，24㎡を上層調査した。西側のトレンチを１Ｔ，東側を２Ｔとした。下層調査は，１Ｔの西端２ｍ×２ｍ，２Ｔの西端２ｍ×１ｍ，計６㎡を対象とした。これらを人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

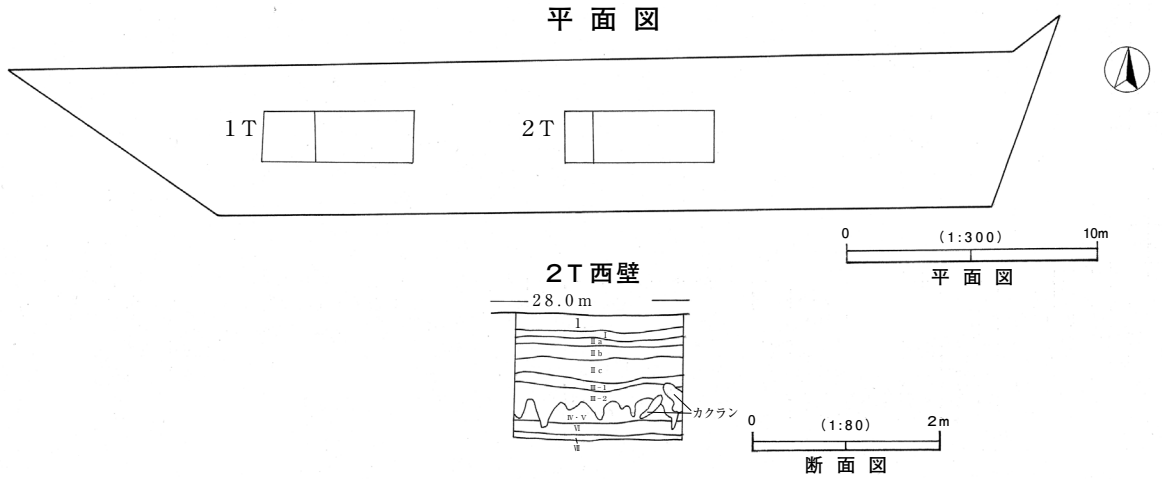
調査期間は，平成 22 年 10 月５日から８日で，５日機材搬入，杭設置，トレンチ設定。６日重機による掘削（終了），トレンチ内精査，下層調査。７日土層調査・実測記録，下層調査。８日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

調査の概要

対象地は墓地であったため，攪乱が激しかった。土層観察所見は，２Ｔ西壁で行った。１の表土は，砂・砕石混じりの黒褐色土で，撤去工事に伴う攪乱土と判断した。以下，Ⅰ層（旧表土。7.5YR4/2 灰褐色土。），Ⅱａ層（7.5YR2/2 黒褐色土，及び 3/3 暗褐色土。腐植堆積土層。），Ⅱｂ層（7.5YR3/3 暗褐色土に 4/3 褐色土が斑状に混じる。新期富士テフラ層。），Ⅱｃ層（7.5YR3/3 暗褐色土に 4/3 褐色土が斑状に混じる。上の



第 10 図　ヲイノ作遺跡ｂ地点位置図



第11図　ヲイノ作遺跡ｂ地点トレンチ実測図

層に似るが，下の層へ漸移する。径５㎜の黄色スコリアをまばらに含む。ローム漸移層。），Ⅲ-1層（7.5YR4/4褐色土，3/3暗褐色土がにじむ。ソフトローム。），Ⅲ-2層（7.5YR4/4褐色土。ソフトローム。），Ⅳ・Ⅴ層（7.5YR4/6褐色土。径１㎜黒色スコリア富む。径１～３㎜赤色スコリアを含む。ハードローム。），Ⅵ層（7.5YR5/6明褐色土。火山ガラス・径１㎜黒色スコリア富む。径１㎜灰色スコリア・橙色スコリア，径２～３㎜褐色スコリアを含む。ＡＴ包含層。），Ⅶ層（7.5YR4/6褐色土。径２～３㎜黒色スコリア，火山ガラスを含む。）であり，ここでは比較的良好な土層が観察された。地表面の標高は27.84 m～27.88 m，Ⅲ層上面の標高は，27.2 m前後，Ⅵ層は，26.57 m～26.74 mであった。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

攪乱が激しかった。一部に良好な土層を認めたが，遺構・遺物とも検出されなかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会（1983年）『八千代の遺跡―千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書―』

財団法人千葉県文化財センター（1994年）『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他―東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書―』

八千代市西八千代遺跡群調査会（1996年）『千葉県八千代市仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書―西八千代東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査―』（ａ地点）

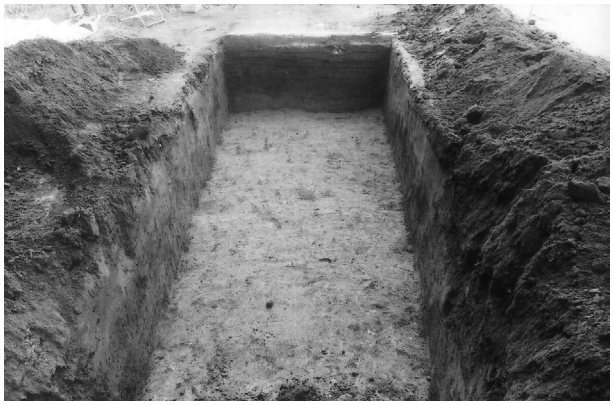
図版４　ヲイノ作遺跡ｂ地点

（１）　調査前状況（西から）

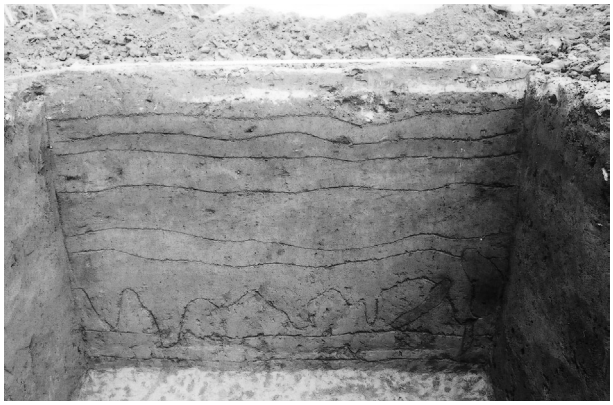
（２）　調査状況

（３）　１Ｔ上層完掘状況

（４）　１Ｔ下層調査状況



（５）　２Ｔ完掘状況



（６）　２Ｔ西壁土層断面

４．小板橋遺跡 e 地点

遺跡の立地と概要

小板橋遺跡は，市域の南部，新川西岸の台地上に立地する。新川低地と高津川低地（ケイガラ谷津）及び小支谷によって画された台地上にあり，標高は 24 m以下である。

本遺跡は，昭和 55 年（1980 年）の宅地造成に先行する調査で認識され，昭和 58 年（1983 年）の『八千代の遺跡』に遺跡№ 245 で登載された。これまでに e 地点を含めて 6 地点の調査が行われている。その結果の概要については，第 4 表を参照されたい。本遺跡は主に縄文時代，古墳時代中・後期，中世，近世の遺跡と捉えることができる。

e 地点は，遺跡の東端に当たり，標高 21 ～ 22 mの台地縁辺で，地点の北～東側は崖状になっている。また，地表面には不自然な段差があり，地形が改変されていると考えられた。

調査の方法と経過

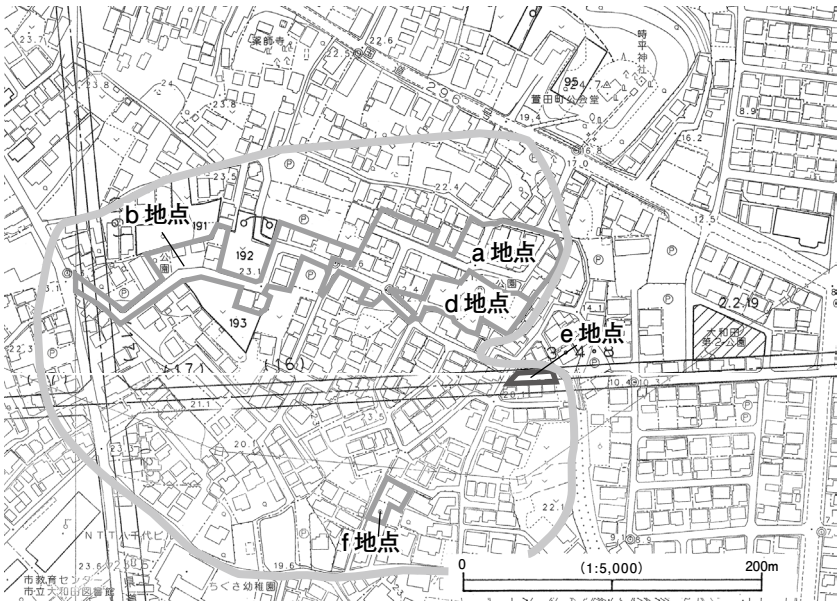
対象区域の形状に合わせ，２m×５mのトレンチを３箇所，２m間隔で設定した。東のトレンチから１Ｔ～３Ｔとした。計 30㎡を人力及び重機で掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成 24 年 3 月 19 日から 26 日で，19 日機材搬入，杭設置，トレンチ設定，地形測量。21 日廃土置場確保等環境整備，人力で掘削。22 日重機による掘削，トレンチ内精査，土層調査・実測記録。26 日重機による埋め戻し，機材を撤収して，調査を終了した。

調査の概要

本地点の不自然な段差地形に，ｄ地点で確認したような中世の地形改変が反映されている可能性も考えられたため，地形測量を実施した。その結果，本地点の最高所は，東端の崖から５～６mの標高 22.572 mの箇所で，ここを含んだ面が標高 22.235 m以上で，周囲より一段高くなっている（第１面とする）。第１面の西側は 20.745 ～ 21.632 mの面（第２面とする），第１面の北側は，21.170 ～ 22.119 mの面（第３面），第２面の北側が 20.705 ～ 21.172 mの面（第４面）となっていると捉えた。第１面に１Ｔを設定し，第１面から第２面への段差，第２面から第４面への段差を含めた箇所に２Ｔを設定し，第２面の西部に３Ｔを設定した。危険を避けるため，第３面，第４面の掘削は行わなかった。

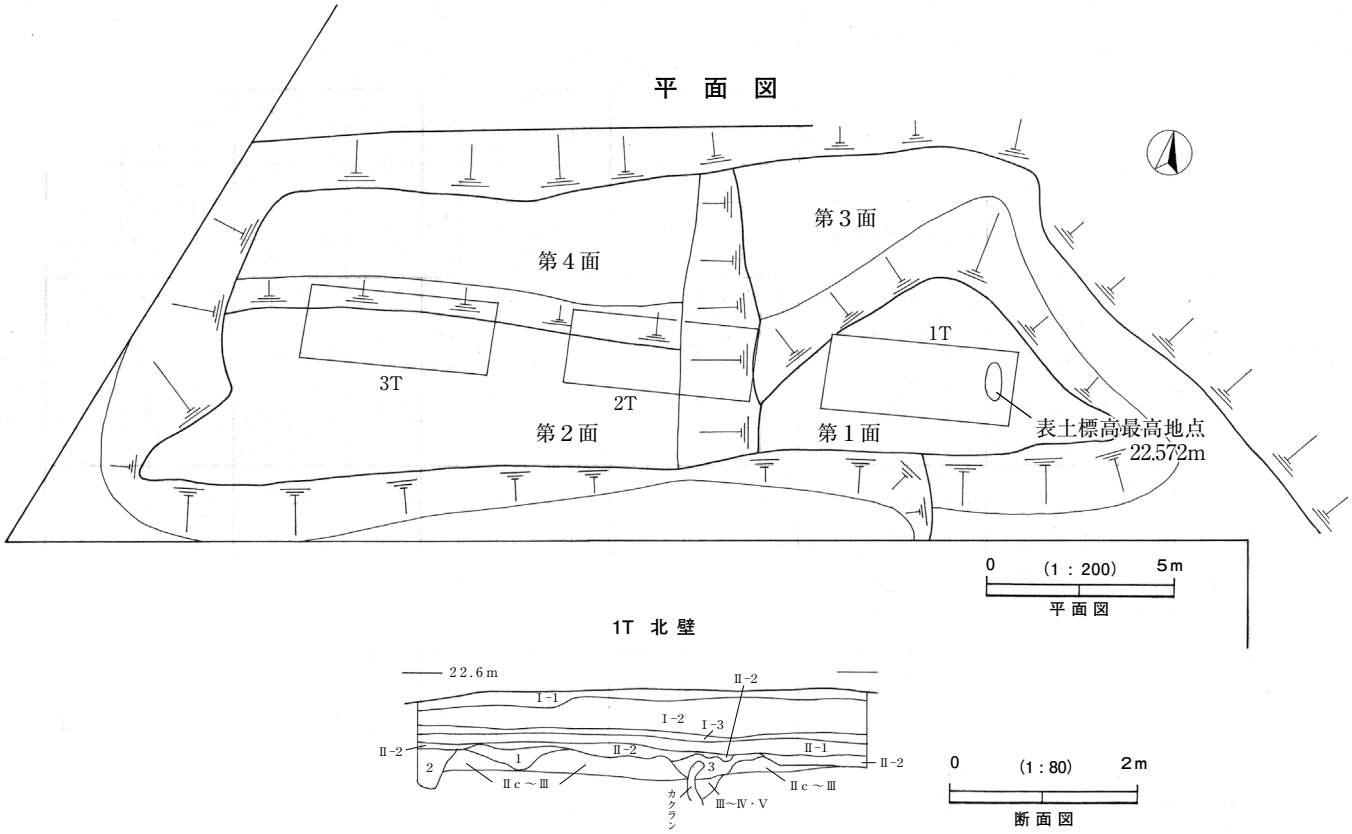
土層観察所見は，１Ｔの北壁で行った。Ⅰ -1 層（表土。7.5YR3/3 暗褐色土。），Ⅰ -2 層（7.5YR3/3 暗褐色土



第 12 図　小板橋遺跡 e 地点位置図

第４表　小板橋遺跡各調査地点の概要

地点名	調査面積（㎡）	遺構	遺物
a	確認調査 5,379.55	竪穴住居跡 4 軒	土師器
	本調査 5,379.55	古墳時代竪穴住居跡 15 軒（中期 7 軒，後期 6 軒，不明 2 軒），土坑 1 基	土師器，須恵器，石製模造品・未製品，土玉
b	394/3,400	古墳時代竪穴住居跡 4 軒，土坑 4 基，溝状遺構 4 条	古墳時代土師器
	1,536	古墳時代竪穴住居跡 2 軒（中期末～後期初），土坑 4 基	古墳時代土師器，鉄鎌，土玉，砥石，臼玉，臼玉未製品，滑石片等，近世陶磁器，すり鉢，泥面子，寛永通宝
	第 2 次　9/16	なし	土師器
c	225/1,514.03 本調査 107	古墳時代溝状遺構 3 条	縄文土器（前期），古墳時代土師器
d	170/1,846.8	中世台地整形遺構，土坑 32 基，溝跡 1 条	古墳時代土師器，中世陶器
	1,177	縄文時代陥穴 6 基，古墳時代竪穴住居跡 1 軒，土坑 3 基，中世台地整形遺構，中近世土坑 200 基，溝状遺構 2 基，溝跡 11 条	縄文土器，弥生土器，古墳時代土師器，支脚，石製模造品 (双孔円板)，石製紡錘車，奈良・平安時代土師器，須恵器，中近世陶器，瓦質土器，管状土錘，板碑，砥石，鉄釘等
e	30/333	なし	古墳時代土師器
f	30/277.38	縄文時代陥穴 1 基	近世土器



第 13 図　小板橋遺跡 e 地点トレンチ実測図

及び 7/3 にぶい橙色粘土。盛土と考えられる。)，Ⅰ-3 層（7.5YR3/3 暗褐色土及び 3/2 黒褐色土。径２～３㎜黄色スコリアをまばらに含む。旧表土と考えられる。)，Ⅱ-1 層（7.5YR3/3 暗褐色土。径１～３㎜黄色スコリア富む。径３㎜焼土粒子まばらに含む。)，Ⅱ-2 層（7.5YR3/2 黒褐色土・3/3 暗褐色土・4/3・4/4 褐色土が混じり合う。)，Ⅱｃ～Ⅲ層（7.5YR4/4 褐色土。ローム漸移層～ソフトローム。)，Ⅲ～Ⅳ・Ⅴ層（7.5YR4/4・4/6 褐色土。ソフトローム～ハードローム。)，１層（7.5YR4/3・4/4 褐色土。)，２層（7.5YR4/3 褐色土。径１～２㎜黄色スコリアまばらに含む。)，３層（7.5YR4/3・4/4 褐色土。径５～ 10㎜黄色スコリアを含む。）を確認した。１Ｔには風倒木痕と見られる不整形な穴の痕跡があり，１層～３層はそれに関わる土と判断した。地表面の標高は 22.27 m～ 22.42 mで，旧表土Ⅰ層上面は 21.9 ～ 22.05 m，Ⅲ層上面は 21.78 mである。

２Ｔの地表面は，段差を反映し東側が高く 22.201 m，西側は 21.260 mと 0.941 mの差がある。地表下 30㎝で粘土質の褐色土が検出され，ローム層はほとんど削り取られていると判断された。第１面～第２面間の段差は，これに起因しているのであろう。粘土質褐色土には杭や現代廃棄物が含まれており，現代の攪乱の痕跡と判断した。

３Ｔでは，東側の一部に白色粘土が検出されたが，他はロームブロック混じりの土が地表下 110㎝まで続いていた。この土は埋土と判断された。本地点の北側には新川の低地から西に入る小谷があるらしいことは，現在の地形の起伏から判断され，以前湧水があったという話も聞いている。この小谷の影響で，元来 e 地点は西に向かって低くなるという地形であったのかもしれない。その谷を埋める土がこの埋土と考えられた。

遺物は，１Ｔから古墳時代と考えられる土師器小細片６点が出土した。１点にはハケ目が認められる。小細片のため図化は省略した。地形改変という人力が加えられていることは確認できたが，その時期が中世以前に遡るという根拠は見出せなかった。

調査のまとめ

明確な遺構は無く，遺物は古墳時代と考えられる土師器の小細片６点であった。

本遺跡は，標高 20 m以上の洪積台地上に立地しているにも関わらず，基本層序のⅡａ層～Ⅱｃ層が失われている地点が多い。このことは，それらの土が削り取られたためと判断される。その時期については，ｄ地点のように中世に遡ると考えられる地点もあるが，その他の地点では，近世以降，あるいは近代～現代まで下る可能性もある。ｅ地点は，ｄ地点と小谷を挟んで対峙する位置にあり，中世に関わる遺物などの検出にも努めたが，認められなかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会（2008 年）『千葉県八千代市小板橋遺跡―ｂ地点埋蔵文化財発掘調査報告書―』（ｂ地点）

八千代市教育委員会（2013 年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 24 年度』（ｄ地点確認調査）

八千代市教育委員会（2013 年）『千葉県八千代市小板橋遺跡ｄ地点―宅地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書―』（ｄ地点本調査）

八千代市教育委員会（2014 年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 25 年度』（ｆ地点）

図版５　小板橋遺跡ｅ地点

（１）　調査前状況（西から）

（２）　調査前状況（東端）

（３）　調査前状況（東から）

（４）　調査状況

（５）　１Ｔ完掘状況

（６）　１Ｔ北壁土層断面

（７）　２Ｔ完掘状況

（８）　３Ｔ完掘状況

5．阿蘇中学校東側遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

阿蘇中学校東側遺跡は，市域の中央やや北東寄りに所在する。佐倉市との市境を流れる小竹川の低地から西に入る森下谷津及び西谷津を北～南東に臨む台地上に立地する。

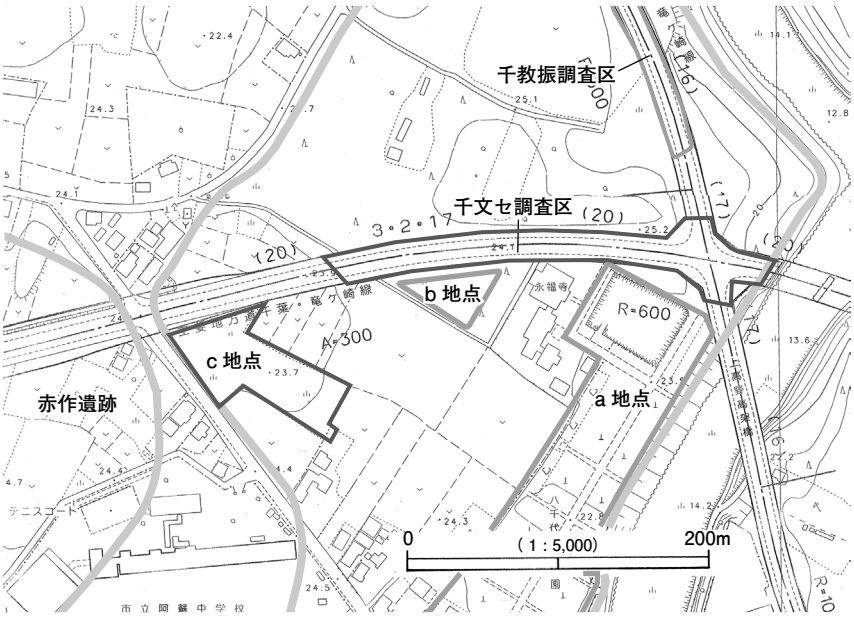
本遺跡は，昭和 46 年（1971 年）の『千葉県記念物所在地図 1970』に追加№ 267 の遺跡として登載され，昭和 53 年（1978 年）の『八千代市の歴史』には№ 14 として，昭和 58 年（1983 年）の『八千代の遺跡』以降では№ 119 として登載されている。これまでに 4 地点で調査が行われている。西谷津に臨む a 地点では，遺構として縄文時代中期の土坑，弥生時代後期の竪穴住居跡 19 軒，古墳時代後期～奈良時代と考えられる方形周溝状遺構 2 基・土坑群が検出され，遺物として縄文土器・打製石斧，弥生土器，須恵器等が検出されている。遺跡中央の b 地点では遺構・遺物とも検出されなかった。財団法人千葉県文化財センター（以下，本項においては「千文セ」とする。）の一般国道 296 号道路改築事業に先行する調査では，遺構として縄文時代の土坑 3 基，中近世の溝跡 2 条・土坑 23 基，遺物として旧石器，縄文土器，弥生土器，奈良・平安時代土師器が検出された。財団法人千葉県教育振興財団（以下，本項においては「千教振」とする。）の県道千葉竜ヶ崎線の改良事業に先行する調査では，遺構として旧石器時代石器集中 3 箇所，縄文時代の土坑 5 基，弥生時代の竪穴住居跡 1 軒・溝跡 1 条（方形周溝状遺構か）が，遺物として旧石器，縄文土器，弥生土器が検出された。なお，千文セの調査では，西に隣接する赤作遺跡の東部も調査しており，遺構として，旧石器時代遺物集中地点 1 箇所，縄文時代土坑 3 基・陥穴 1 基，中近世の溝跡・道跡 6 条・土坑墓 12 基・土坑 20 基・ピット 10 基を検出し，遺物は，旧石器，縄文土器，弥生土器，奈良・平安時代土師器・須恵器，中近世の陶磁器・土器・泥面子・数珠玉・砥石・鉄釘・刀子・鉄砲玉・銅鏡・銭貨・人骨が出土した。

本遺跡は，旧石器時代～近世に至る複合遺跡で，遺跡南東部の西谷津に面したところに，主に弥生時代の集落跡があり，遺跡西部の赤作遺跡との隣接地域には，主に中近世の土坑墓群が展開すると考えられる。

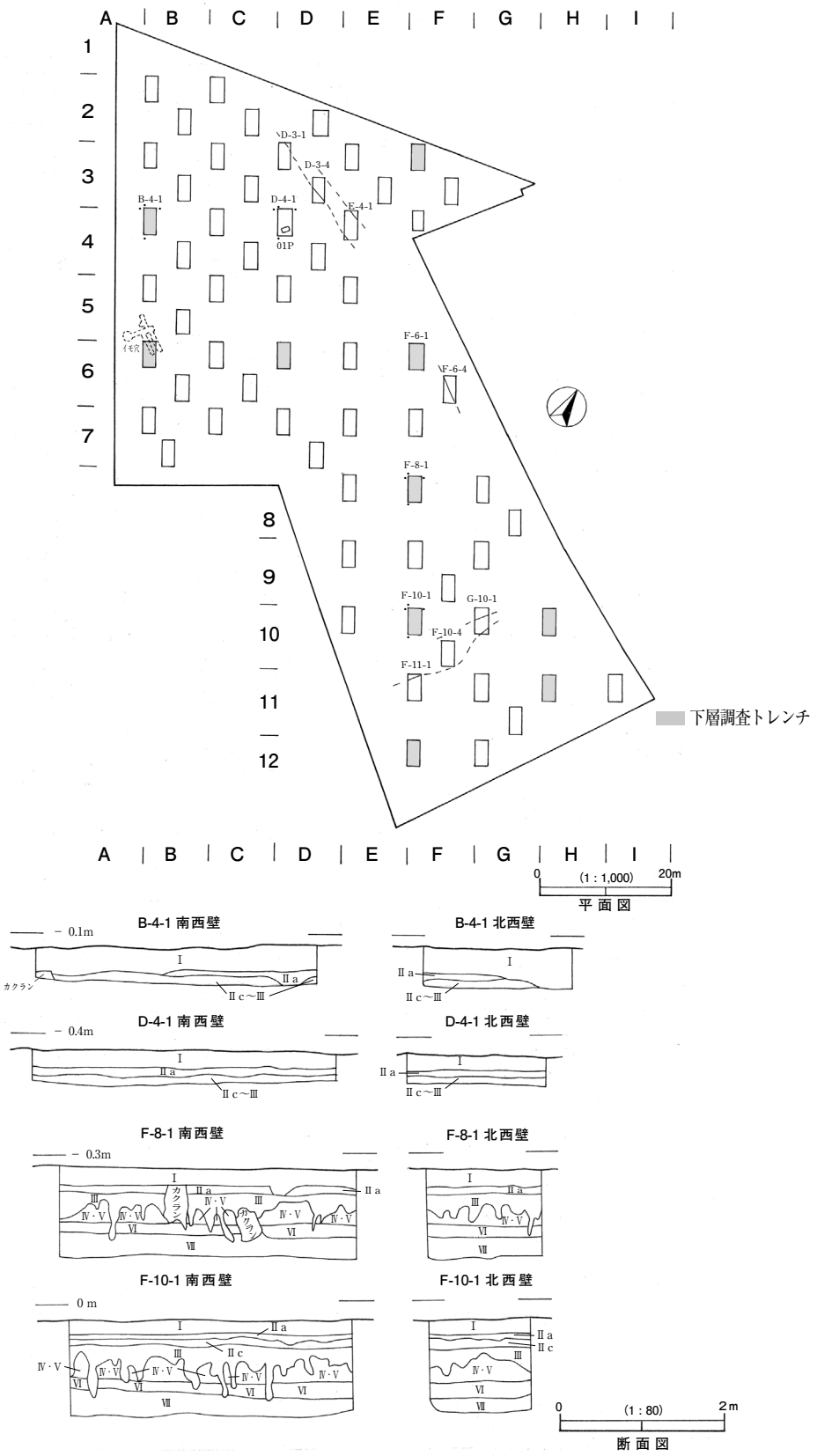
c 地点は，遺跡西部に当たり，標高 24 m の台地上平坦面の畑地である。

調査の方法と経過

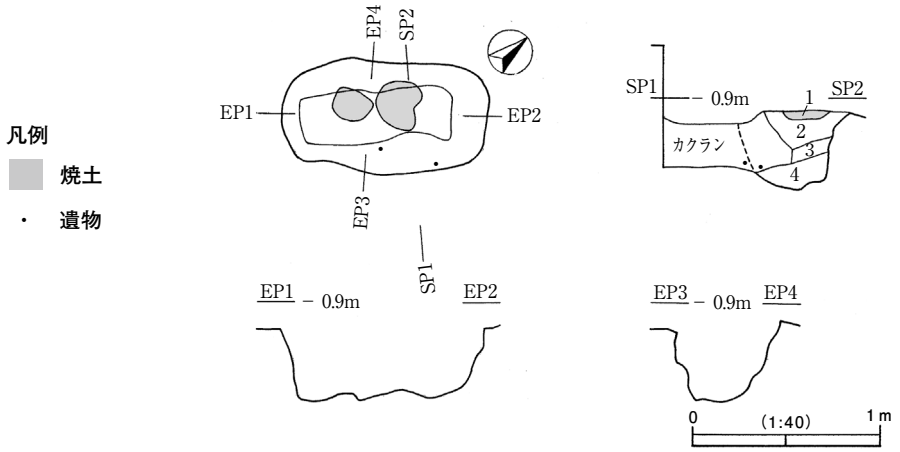
対象区域を 10 m 方眼に区画し，アルファベットと数字の組合せでグリッド名とし，さらにその中を 5 m 四方に 4 区画し，1 ～ 4 と小グリッド名を付けた。2 m × 4 m を原則としてトレンチを 63 箇所，合計 502 ㎡分設定し，上層調査を行った。下層調査は，概ね 20 m 四方に 1 箇所の割合でトレンチを選定して行った。



第 14 図　阿蘇中学校東側遺跡 c 地点位置図



第 15 図　阿蘇中学校東側遺跡 c 地点トレンチ実測図



第 16 図　01P 実測図

人力及び重機でこれらを掘削し，遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は，平成 23 年 10 月 12 日から 28 日で，12 日機材搬入，環境整備，杭設置，トレンチ設定。13 日・14 日トレンチ設定，13 日～ 18 日人力による掘削。17 日～ 19 日重機による掘削，トレンチ内精査。19 日～ 26 日土層調査･実測記録，下層調査。21 日･24 日遺構（01 P）調査。27 日･28 日重機による埋め戻し，機材を撤収し，調査を終了した。

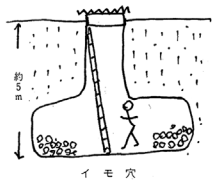
調査の概要

土層の観察所見としては，Ⅰ層（表土），Ⅱａ層（黒色土，腐植堆積土層），Ⅱｃ層（褐色土，ローム漸移層），Ⅲ層（褐色土，ソフトローム），Ⅳ･Ⅴ層（褐色土，ハードローム），Ⅵ層（明褐色土，ＡＴ含有層），Ⅶ層（褐色土，第２黒色帯上部）を確認した。

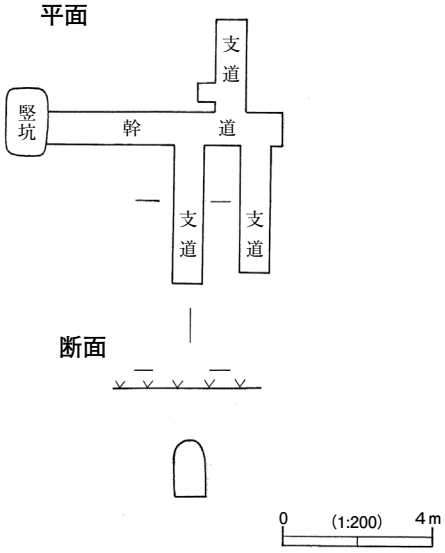
遺構としては，Ｄ -4-1 で土坑１基（01 Ｐ）が検出された。隅丸長方形で，上面は 1.09 m × 0.6 m，底面は長方形で 0.8 m × 0.29 m，深さは 0.34 ～ 0.40 mで底面に凹凸がある。長軸方位角は，N -41° - E である。覆土は，１（赤褐色焼土。明確な焼土），２（暗褐色土。ローム・黒色土を少量含む），３（黒褐色土。黒色土に少量のローム･暗褐色土が混じる），４（暗褐色土。ロームを少量，黒色土を微量含む）で，１の焼土がややしまっていた以外は，しまり・粘性とも弱い土であった。出土遺物は３点で，瓦質土器，瓦，細礫であった。瓦はごく新しいもので，瓦質土器とともに攪乱からの出土である。近世以降の土坑と判断した。

他に，D -3-1 ～ D -3-4 ～ E -4-1 ～ F -6-4 を通る溝跡と，F -11-1 ～ F -10-4 ～ G -10-1 を通る溝跡を検出した。近代以降の溝跡と判断した。

また，Ａ -5-4 ～ Ｂ -5-2 ～ Ｂ -6-1 に亘って，いわゆるイモ穴と呼ばれる地下式の横穴を検出した。竪坑が深さ 290㎝掘られ，その半分以下の壁を横穴として掘り進め，これを幹道とし，そこから枝分かれする穴として一方に２本，他方に１本が掘られていた。竪坑は埋まっていたが，横穴は空洞で残っており，埋土には，清涼飲料水の空き缶が含まれていた。このためごく新しいものと判断した。イモ穴については，『八千代市史資料編　民俗』に絵入りで記録がある。サツマイモの貯蔵方法として，イモ穴に入れて田植の頃まで保存する方法があった。イモ穴は一丈位の深穴のことで，入口が狭く奥は長靴のように広くなっていて，一方向だけでなく二方にも三方にも掘ってあり，大人が立って歩ける程の高さがあり，はしごを使って出入りした。たいていの農家では庭に大きなイモ穴を掘り毎年使っていた，という（小川 1993 年）。また，今回検出のものと似たイモ穴が，現在 60 歳代の村上在住の市民が子どもの頃（昭和 30 年代か），家の庭先にあったそうである。深さ５～６ｍあり，梯子で上り下りした。サツマイモ・サトイモ・ショウガ等の保存に使っていたという。この他，イモ穴には，稲藁を敷き籾殻を充填してイモと土が接しないようにし，空気穴としてパイ



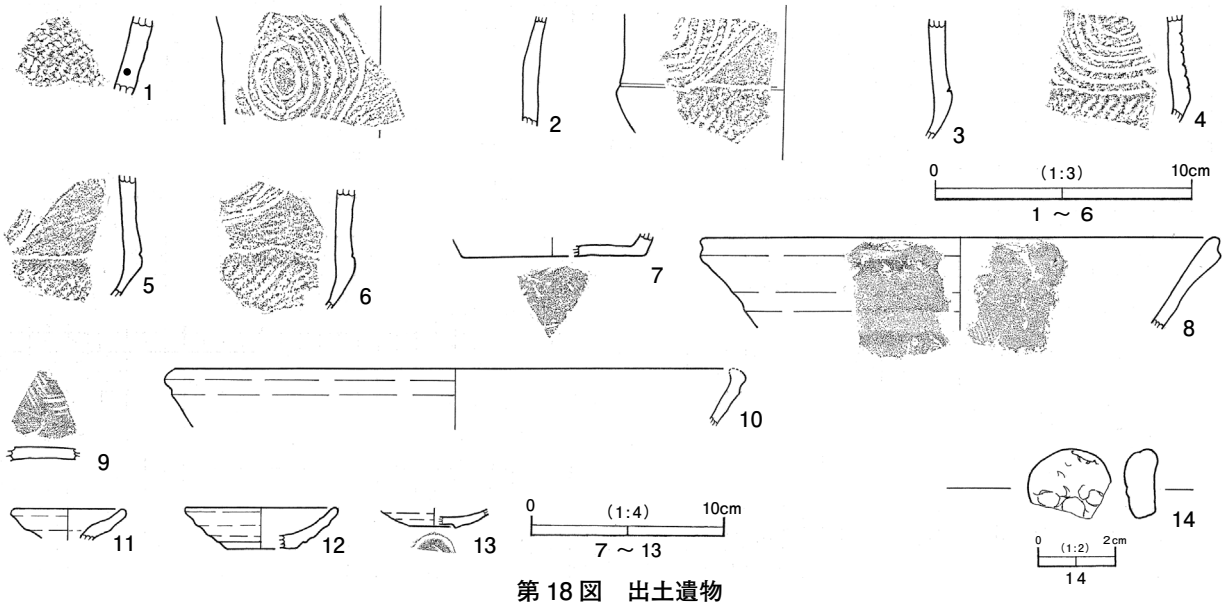
小川（1993 年）から転載



第 17 図　イモ穴参考図

第５表　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点遺構・各トレンチ出土遺物数

	縄文土器	土師器	須恵器	かわらけ	素焼土器	瓦質土器	陶器	陶磁器	焼成粘土塊	瓦	泥面子	鉄製品	剥片	細礫	小礫	礫片	不明	計
01 P						1				1				1				3
B -4-1	5	3						4	1									13
B -6-1							1											1
C -3-4								1										1
C -4-1			1															1
C -4-4									1									1
C -6-4																1		1
D -4-1		2					1				1	1						5
D -6-1		2			1		7			2		2			1			15
D -7-1		2																2
E -3-4				1			1											2
E -5-1		1																1
E -7-1							1											1
F -3-1		2													1			3
F -4-1							1											1
F -6-1		1					1			1		1			1	1		6
F -6-4		1		1			1	1										4
F -8-1		2						2										4
F -9-1					1													1
F -10-1							2	1		1					1	1	1	7
F -12-1					1			1		1					1	1		5
G -9-1	1																	1
I -11-1								3					1					4
計	6	16	1	2	3	1	16	13	2	6	1	4	1	1	5	4	1	83



第 18 図　出土遺物

第６表　阿蘇中学校東側遺跡 c 地点遺物観察表

No.	出土地点	器形	状態・部位	計測値 (mm)	○胎土／石材　●色調	整形・調整・文様などの特徴	その他
1	G -9-1	深鉢	胴部	小片	○繊維，細砂少 ●内）暗褐色　外）暗褐色，赤褐色	内）横方向ナデ，ミガキ。 外）縄文ＲＬか。ループ文か。	縄文土器 前期前半
2	B-4-1	深鉢	胴部	復元上端径 128 残存高 42	○粗砂，細砂，暗赤褐色粒子少 ●内）灰褐色，淡褐色 外）淡赤褐色，褐色，黒色	内）ナデ。 外）同心円状沈線，地文縄文ＬＲか。	縄文土器 中期初頭 五領ヶ台式か ２～６は同一個体と考えられる。
3	B-4-1	深鉢	胴下部	復元最大径 130 残存高 45	○粗砂，細砂 ●内）暗褐色，淡褐色，黒色，灰褐色 外）褐色，暗褐色，赤褐色，橙褐色	内）ナデ。 外）沈線，地文縄文ＬＲか。	
4	B -4-1	深鉢	胴下部	残存高 41			
5	B-4-1	深鉢	胴下部	残存高 47			
6	B-4-1	深鉢	胴下部	残存高 46			
7	D-6-1	甕	底部	復元底径 96	○粗砂，細砂少　●内）淡橙色，淡褐色 外）褐色，暗褐色，淡褐色	内）ナデ (平滑)。 外）ヘラ削り，底外）ヘラ削り。	土師器か
8	F-10-1	すり鉢か	口縁部	復元口径 270 残存高 48	○緻密 ●紫褐色　　割口）淡褐色	ロクロ成形。器面全体にひびがある。また一部に歪みがあり，二次焼成を受けているのではないか。	陶器
9	C-4-1	すり鉢	底部	小片，扁平	○細砂 ●内）黒灰色と灰色の筋　外）黒褐色	内）ろくろ目が平滑になっている。 底外）ナデ。	瓦質土器か
10	F-4-1	鉢か	口縁部	復元口径 302 残存高 30	○緻密 ●紫褐色　割口）白色	ロクロ成形。両面に施釉。	陶器
11	B-6-1	小皿か	口縁～体部 １／４弱	復元口径 60 残存高 16	○緻密 ●灰白色	ロクロ成形。外面に施釉。	陶器
12	D-6-1	小皿	口縁～体部 約１／６	復元口径 80 残存高 22	○緻密 ●白色，褐色味あり。	ロクロ成形。両面に施釉。	陶器
13	B-5-1	小皿か	底部	復元底径 22	○緻密 ●内）白黄色　外）白色，淡褐色	ロクロ成形。内）ナデ。施釉。 外）ナデ痕顕著。	陶器
14	D-4-1	泥面子	２／３	21 ×残存 19，厚さ 8	○緻密 ●淡橙色，淡橙褐色	型抜き，仁王の顔面か。	

プ等を差し込むようなタイプもあり，その場合は，今回検出したような大規模なものではなく形態も単純なもので，現在もイモ類の保存のために掘られるようである。

遺物は，総数 83 点出土した。種類と出土地点は，第５表にまとめた。土師器と陶器が各 16 点で主体を成す。陶磁器としたものと瓦は，ごく新しいものと見られる。鉄製品は，銹化して崩れている。

14 点を抽出し図示した。

調査のまとめ

遺構としては，近世以降と考えられる土坑１基であった。

遺物は縄文土器，土師器，陶器などであるが，小細片が多く，散漫な出土状況であった。

遺構・遺物ともに密度の低い地点であることを確認した。ほかに近代以降の溝跡や昭和時代と考えられるイモ穴を検出した。

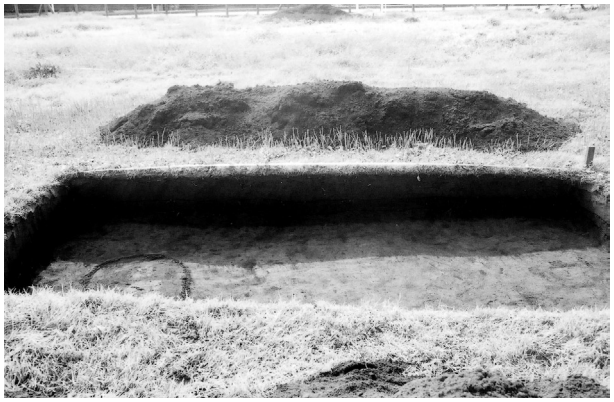
図版６　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点（1）

（1）　調査前状況

（2）　調査状況（西から）

（3）　調査状況（北から）

（4）　B-４-1 南西壁土層断面



（5）　D-４-1 南西壁土層断面

（6）　B-４-1 遺物出土状況

（7）　D-４-1　01P 検出状況

（8）　01P 土層断面

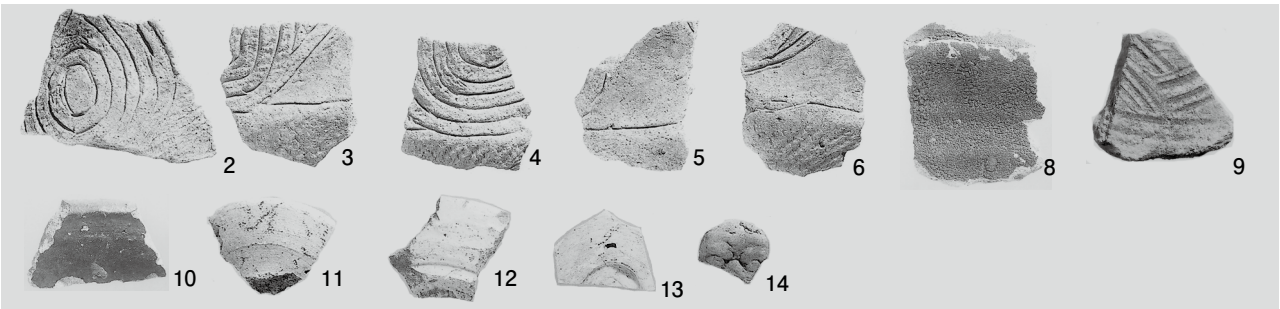
図版７　阿蘇中学校東側遺跡 c 地点（2）

（1）　01P 完掘状況

（2）　G-10-1 溝跡検出状況

（3）　F-８-1 南西壁土層断面

（4）　イモ穴内部の状況



（5）　出土遺物　（番号は第 18 図と一致）

引用文献及び本遺跡に関する調査報告書

千葉県教育委員会（1971 年）『千葉県記念物所在地図 1970』史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図

八千代市史編さん委員会（1978 年）『八千代市の歴史』

八千代市遺跡調査会（1980 年）『阿蘇中学校東側遺跡』（ａ地点第１次）

八千代市教育委員会（1983 年）『八千代の遺跡―千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書―』

八千代市遺跡調査会（1984 年）『千葉県八千代市阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』（ａ地点第３次）

小川奉巳（1993 年）「食生活」，八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 資料編 民俗』

財団法人千葉県文化財センター（1999 年）『一般国道 296 号道路改築事業埋蔵文化財調査報告書１―八千代市赤作遺跡･阿蘇中学校東側遺跡―』

財団法人千葉県教育振興財団 (2007 年)『八千代市向境遺跡・雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡―県単道路改良委託（幹線道路網整備）（主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査）―』

八千代市教育委員会（2010 年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書　平成 21 年度』（ｂ地点）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばけんやちよし　こうきょうじぎょうかんれんいせきはっくつちょうさほうこくしょ　Ⅶ　へいせい 26 ねんど
書名	千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ　平成 26 年度
副書名	向山遺跡ｃ地点　向山遺跡ｆ地点　ヲイノ作遺跡ｂ地点　小板橋遺跡ｅ地点　阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点
編著者名	常松成人
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒 276-0045　千葉県八千代市大和田 138 番地 2　TEL 047(483)1151 代表
発行年月日	平成 27 年 1 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
むこうやまいせきしーちてん 向山遺跡ｃ地点	おおわだしんでんあざむこうやま 大和田新田字向山 507-80 ほか	1221	173	35 度 43 分 45 秒	140 度 5 分 52 秒	平成 13 年 11 月 13 日 ～ 平成 13 年 12 月 4 日	上層　81, 下層　20 ／630	歩道建設
むこうやまいせきえふちてん 向山遺跡ｆ地点	おおわだしんでんあざむこうやま 大和田新田字向山 500-10 ほか	1221	173	35 度 43 分 47 秒	140 度 5 分 41 秒	平成 19 年 5 月 10 日 ～ 平成 19 年 5 月 24 日	上層 101, 下層　11 ／486	歩道建設
おいのさくいせき ヲイノ作遺跡 びーちてん ｂ地点	みどりがおかごちょうめ 緑が丘五丁目 901 番 18・19	1221	162	35 度 43 分 47 秒	140 度 4 分 56 秒	平成 22 年 10 月 5 日 ～ 平成 22 年 10 月 8 日	上層　24, 下層　6 ／221.1	歩道建設
こいたばしいせき 小板橋遺跡 いーちてん ｅ地点	おおわだあざふるやしき 大和田字古屋敷 359 番 21・22	1221	245	35 度 42 分 58 秒	140 度 6 分 34 秒	平成 24 年 3 月 19 日 ～ 平成 24 年 3 月 26 日	上層　30 ／333	道路用地 管理
あそちゅうがっこうひがしがわ 阿蘇中学校東側 いせきしーちてん 遺跡ｃ地点	よなもとあざさんや 米本字山谷 2713-5，2714-1，2715-3	1221	119	35 度 44 分 48 秒	140 度 7 分 26 秒	平成 23 年 10 月 12 日 ～ 平成 23 年 10 月 28 日	上層 502, 下層　80 ／ 4,981.25	消防署 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向山遺跡ｃ地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	縄文時代土坑２基	剥片 縄文土器（前期，中期）， 焼成粘土塊，石鏃	
向山遺跡ｆ地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	なし	なし	
ヲイノ作遺跡ｂ地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	なし	なし	
小板橋遺跡ｅ地点	包蔵地	古墳時代	なし	古墳時代土師器	
阿蘇中学校東側遺跡 ｃ地点	包蔵地	縄文時代 中近世	中近世土坑１基	縄文土器 中近世陶磁器	
要　約	**向山遺跡ｃ地点**　旧石器時代の遺物として剥片が出土した。縄文時代は，前期（黒浜期か）の土坑２基（重複）を検出し，前期～中期の土器，焼成粘土塊，石鏃等が出土した。 **向山遺跡ｆ地点**　遺構・遺物とも検出されなかった。 **ヲイノ作遺跡ｂ地点**　攪乱が激しかったが，一部に良好な土層を確認した。遺構・遺物とも検出されなかった。 **小板橋遺跡ｅ地点**　明確な 遺構は検出されなかった。遺物は，古墳時代と考えられる土師器小細片であった。 **阿蘇中学校東側遺跡ｃ地点**　遺構は，中近世の土坑１基であった。遺物は，縄文土器，土師器，陶器等であるが，小細片が多く，散漫な出土状況であった。他に，近代以降の溝跡や昭和時代のイモ穴を検出した。				

千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ
平成 26 年度

発　行　日　　平成 27 年 1 月 30 日
編集・発行　　八千代市教育委員会　教育総務課
〒 276-0045　八千代市大和田 138-2
TEL　047（483）1151　代表
印　　刷　　松樹印刷有限会社